

訴訟法規則修正案

完



同法省記錄文庫  
第九百三十二號

第五號  
第二架  
第五

司法省記錄文庫  
第一三號

司法省  
第一二號  
寄贈圖書文庫

法

XB500  
S 6  
1

并啓陳者兼テ差出置候訴訟法草案按第七篇改正  
正按進達仕候右ハ四部ニ分テ其第一部ハ総  
則ニシテ之レヲ二節ニ分テ其第一章ハ曰章  
第一第二及ヒ第四節ヲ合併シ其第二節ハ曰  
ノ第三節ニ当ルモ之ニ御座候  
第一節(曰ノ第一第二第四節)中特別執行ノ余  
令及ヒ特別猶豫ノ余令ノ代リニ権制執行ヲ  
為スノ権アル執行状若クハ権制執行ノ猶豫  
ヲ要シ得ハキ判決(裁判)若クハ余令(令)若ク  
裁判手續ノ基本ト為シテ編成イタシ候因テ  
総テノ規則ヲ簡易ニシテ種類ヲ減省シ其他実

同  
書

際施行ヲ簡便ニシテ入獨乙佛朗西ノ先例ニ倣  
ト候事ヲ目的トイタル申候

右改正ハ僅ニ体裁ヲ改メ候ノミニテ曰草按  
ノ諸条ハ其終ニ存シ置申候尤モ一二ノ条ニ  
或ハ改正ヲ加ヘ或ハ順序ヲ改メ候モ有之  
候

第二節(曰ノ第三節使吏ノ職務)ハ殆ト全ク曰  
ノ如ク差置申候

第二部金匱ノ請求ノ権制執行ヲ載セ左ノ如  
ク細別イタル候

第一章 動産ノ権制執行

第二章 不動産権制執行

第三章 船舶権制執行

第一章中第一節(質入)ノ改正ハ極メ僅少ニ  
シテ第二節(請求質入)及ヒ第三節(分配手續)ハ  
新ニ相加ヘ申候

第二章中土地権制糶賣(曰条ニ二三ノ改正増  
補ヲ加フ)ヲ第一節トイタルニ新ニ第二節ヲ加  
ヘ土地権制管理ヲ載セ申候

第三章(船舶)ニ就キラノ権制執行(此章モ亦只  
改良ヲ加ヘタルマテニテ曰草按ノ主意ヲ存  
シ置申候

右第二章第三章土地及ヒ船舶権制賣却ハ日本  
草按ノ主意ニ基キ判事之レヲ執行セヌ判事

ノ差圖ヲ以テ裁判使吏之レヲ執行スル一ニ  
イッレ且ツ地券ノコト租税ノコトハ控テ日  
本ノ法則ヲ斟酌イタシ候將亦近日索國ニ於  
テ發行スル新法ニシテ手續ノ便利ナルモノ  
ハ之レヲ採用イタシ候

第三部(只一節ノミ)ハ金圓ニ関マサル請求ノ  
權制執行ニシテ是レハ日本文草按ニ載セサ  
ルモノニ候

亦邦ニ於テハ裁判所ノ判決ヲ實行スル為メ  
亦人ノ差押ヲ為スノ法ナク且ツ此法ヲ設ク  
可ラズ然ルニ獨國ノ訴訟法ニテハ之レヲ直  
接ノ權制方法ト為シ入行為ノ上ニ之レヲ

實行スルノ法アルコト故ニ日本法ハ大ニ之レ  
ト異ナル所ナキヲ得ヌ因テ仏朗西訴訟法第  
千百四十二條及ク其以下ノ條々ニ適スル學  
說ヲ基本トイタシ候

第四部(只一節ノミ)曰草按第六篇第三節ニ掲  
ケタル差押規則ヲ實ニ本部ニ載セタルハ差  
押執行規則ノ続キニ於テ止ムヲ得サル次第  
ナリ此規則ハ獨乙訴訟法ヨリモ却テ綿密ニ  
シテ殊ニ土地船舶及ク倉入質差押ノ法ヲ定  
メタルモノニシテ執行規則ノ附録トシテ始  
メテ十分ノ義理ヲ尽ヌモノニ候

質入篇ノ終末マテ嘗テ卑見ヲ申出置候右ハ



ラビヤウ氏訴訟規則修正原案

目錄

第一編 裁判所

第一章 裁判権限〔物件：関スル管轄〕

第二章 裁判所〔管轄〔場所：関スル管轄〕

第一 普通裁判管轄

第二 特別裁判管轄

第三 数多ノ裁判管轄ノ撞着

第四 物ニ付テ、裁判管轄

第五 上級裁判所ヨリ管轄裁判所ヲ定ム

事

第三章 裁判所ノ管轄ニ付テ訴訟人ノ認

諾及ニ非管轄裁判所ノ審理ノ結果

第二編 訴訟人

同 共 旨

同 共 旨

第四章 裁判所官吏、回避及忌避  
第五章 檢察官、立會

第二編 訴訟人

第一章 訴訟能力  
第二章 共同訴訟  
第三章 訴訟參加  
第四章 訴訟代人及附添人  
第五章 訴訟費用及其保認  
第六章 無資力者、費用償納猶豫

第三編 審理手續、通則

第一章 裁判官一般、職事及訴訟、整理  
第二章 口頭、審判及各種、準備

第三章 審判、公行及訟廷取締

第四章 裁判所、用語

第五章 判決、宣告及送達、手續

第六章 期日及期限

第七章 記錄

第四編 初審、裁判手續

第一章 始審裁判所、通常手續

第一節 起訴及之、関不、裁判官、命令

第二節 口頭對審、至手續

第三節 口頭對審

第四節 立証通則立証及立証後、口

頭對審

第五節 証人

第六節 鑑定人

第七節 証物種類

第八節 臨檢

第九節 原被告本人ヲ証人トシテ質問

スル事

第十節 証物ヲ確實ニスル事

第十一節 裁判

第十二節 缺席裁判及ヒ缺席審理

第二章 治安裁判所ノ裁判手續

第一節 通帯手續

第二節 催促命令手續

第三節 勸解手續

第五編 上訴

第一章 通則

第二章 控訴

第三章 上告

第四章 再審

第五章 抗告

第六編 特別訴訟

第一章 吾面論究

第二章 為替手形及約束手形ニ関スル訴訟

認

第七編 強迫執行

第一章 通則

第一節 強迫執行ノ實施

第五編 上訴

司法



第二節 使吏ノ職務

第二章 金錢請求ニ関スル強迫執行

第一節 動産ニ関スル強迫執行

第一款 有形動産ニ関スル同上

第二款 請求權及ヒ他ノ財産權ニ関

スル同上

第三款 配当手續

第二節 不動産ニ関スル強迫執行

第一款 強迫賣

第二款 執行官司

第三節

第一款 船舶ニ関スル強迫執行

第三章

第一節 金錢ニ非ラサル請求權ニ関ス

ル強迫執行

第四章

第一節 差押及ヒ返差押

第一編 裁判所 二編 訴訟人

同 去 今

訴訟規則

第一編 裁判所

第一章 裁判權、權限

第一条 凡訴訟ノ裁判權ハ通常裁判所ニ屬ス  
但特別ノ法律ヲ以テ之ヲ他ノ官廳ニ屬セシ  
ムルモ、此ノ限ニテラス

第二条 裁判所ハ裁判權ノ已レニ屬スルハ否  
ヲ定メ、但裁判權ノ所屬ニ付裁判所行政官ノ  
間ニ其權限ヲ爭フ時之ヲ裁判所ノ手続ハ  
特別ノ法律ニ從フ

第三条 通常訴訟ノ裁判權ハ治安裁判所始審  
裁判所控訴裁判所及ヒ大審院ニ屬ス  
序中 治安裁判所ハ判事一名ニテ裁判ヲ為

小至五三全ハ裁判所  
權限ニ係ルヲ以テ判

第一編 裁判所 第一章 裁判權、權限

司法官

又判事教谷アハ時ト至モ一谷ニテ若其專任ノ事件ヲ裁判ス

第五條、治安裁判所ハ在ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ為ス但金額價額十日ニ滿タサルモハ終審ノ裁判ヲ為ス

一、財産権ニ関スル訴訟ニシテ其金額價額百圓ニ滿タサルモハ

第二條、始審裁判所ハ判事三名ニテ裁判ヲ為ス

第七條、始審裁判所ハ治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ為ス

又審裁判所ハ其治安裁判ニ屬スヘキ故ヲ以テ之ヲ拒ムコト得ス

第五條、治安裁判所ハ財産ニ関スル訴訟ニシテ其金額價額百圓ニ滿タサルモハ終審ノ裁判ヲ為ス其下四ニ滿タサルモノハ終審ノ裁判ヲ為ス

左ノ件ニ付テハ金額價額百圓以上ノモノトシテ初審ノ裁判ヲ為ス

一、借家ノ引渡明渡若クハ修繕ニ関シ貸借人ノ間ニ起ル訴訟

二、借家ニ現在スル借家人ノ動産ノ引当權ニ関スル訴訟

三、雇ノ契約ニ関シ雇主雇人ノ間ニ起ル訴訟及ヒ職工ノ契約ニ関シ職人頭職人ノ間ニ起ル訴訟但其契約ノ繼續中ニ限ル

四 旅籠料運送賃又ハ運送物、紛失損傷、  
 賠償ニ関シ、宿主旅客、間又ハ荷主運送  
 人、間又ハ旅人運送人、間ニ起ル訴訟  
 五 家畜ニ関スル訴訟  
 六 此法律又ハ特別ノ法律ヲ以テ治安裁判  
 所、権内ニ屬セシメタル訴訟  
 第六條 始審裁判所ハ判事三名ニテ裁判ヲ為  
 ス  
 第七條 始審裁判所ハ治安裁判所權外ノ訴訟  
 ニ付初審ノ裁判ヲ為ス  
 始審裁判所ノ裁判ハ其治安裁判所ニ屬スルキ  
 故ヨリ以テ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第八條 始審裁判所ハ治安裁判所ノ始審裁判  
 ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ為シ且

第九條 控訴裁判所ハ判事五名ニテ裁判ヲ為

第十條 控訴裁判所ハ始審裁判所ノ始審裁判  
 ニ對スル控訴ニ付終審ノ裁判ヲ為シ且

第十一條 大審院ハ判事七名ニテ裁判ヲ為ス

第十二條 大審院ハ治安裁判所始審裁判所控  
 訴裁判所ノ裁判ニ對スル上告ヲ裁決シ且

第十三條 訴訟物件ノ價額ハ裁判所ノ認定ニ

任ス若シ臨検又ハ鑑定ヲ必要トスルハ職  
権ヲ以テ臨検シ又ハ鑑定人ヲ命スルヲ得  
一訴訟中各種ノ請求アル時ハ其金額價額ヲ合  
算ス一ニ但及訴ニ係ル金額價額ハ合算スル  
ノ限ニ非ス  
收獲権ノ事証。〇〇〇〇ノ争訟ハ其年額  
ニ準シ其價額ヲ算定ス但其確利無期限ナル  
時ハ二十五年間ノ年額ヲ起工一ノカチス

第二章 検事ノ立會

第十四条 検事ハ左ノ場合ニ於テ裁判ニ立會  
ヘシ  
一 國家ノ秩序ニ関スル訴訟  
二 官廳ニ對スル訴訟ニシテ行政裁判ノ管

轄ニ屬セザルモノ

三 郡區町村社寺公舎公舎銀行無名會社ニ関ス  
ル訴訟

四 人事ニ関スル訴訟

五 裁判所管轄ヲ定ムルノ訴訟

六 法律ニ依リ裁判官ノ関與ヲ禁止スルニ  
付テノ訴訟又ハ忌避ノ申立ニ関スル許  
訟

七 未下年瘋癲白痴及ヒ治産ノ禁ヲ受ケタ  
ル者ニ関スル訴訟

八 軍人及ヒ失踪者ニ関スル訴訟

前致項ニ掲クル以外ノ訴訟トモ  
其立會ヲ必要ナリトスル時ハ其裁判ニ

三會<sub>ヲ</sub>得又裁判所<sub>ハ</sub>其職權<sub>ヲ</sub>以テ  
檢事ノ立會<sub>ヲ</sub>請求スル<sub>ヲ</sub>得

第十五條 前條ノ場合ニ於テ裁判所<sub>ハ</sub>訴訟ノ  
事項及ヒ開廷ノ日時<sub>ヲ</sub>檢事ニ通知ス可シ  
檢事<sub>ハ</sub>認廷ニ立會<sub>ニ</sub>其意見<sub>ヲ</sub>陳述ス可シ

八月十一日會議 南部 栗塚 中村 宮成 出席

(第三章) 裁判所ノ管轄

第十六條 凡訴訟<sub>ハ</sub>被告人住所<sub>ノ</sub>地<sub>ノ</sub>裁判所<sub>ヲ</sub>  
以テ管轄<sub>ス</sub>為ス但特別ノ法律<sub>アル</sub>モノ<sub>ハ</sub>  
此限<sub>ニ</sub>テラス

同一ノ訴訟ニシテ被告人數名<sub>アリ</sub>テ其管轄<sub>ス</sub>  
ヲ異ニスル<sub>ハ</sub>其中一名ノ管轄裁判所ニ出  
訴スル<sub>ヲ</sub>得

第十七條 外國ニ在ル者<sub>ハ</sub>本邦<sub>ヲ</sub>出發スル<sub>前</sub>  
居住シタル地方<sub>ノ</sub>裁判所<sub>ノ</sub>管轄ニ屬ス

軍人<sub>ハ</sub>兵營所在地<sub>ノ</sub>裁判所<sub>ノ</sub>管轄ニ屬ス  
學生雇人出稼人其他住所外ニ長ク居留スル<sub>ハ</sub>  
シ<sub>ハ</sub>思量<sub>シ</sub>得<sub>ル</sub>モノ<sub>ハ</sub>其居留<sub>ス</sub>地<sub>ノ</sub>裁判所

、管轄ニ屬ス

第十八条 官廳ニ對スル訴訟ハ其所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬シ租税ニ關スル訴訟ハ其徴収ノ管掌スル官廳所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス

郡正町村社寺公會銀行無名會社ハ其事務所々在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス

第十九条 一定ノ住所十キモハ其本籍ノ地又ハ現ニ居通スル地又ハ所有財産所在地又ハ訴訟物件所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス  
第二十條 。

第二十条 犯罪又ハ準犯罪ニ原因シタル訴訟ハ被告人ノ住所ニ拘ハラズ其事件ノ生シタル地ノ裁判所ニ屬ス

第二十一条 訴訟金及上訴金、付使吏又ハ代人ヨリ訴訟人ニ對スル訴訟ハ本訴ヲ受ケタル裁判所ノ管轄ニ屬ス

。

八月十二日會議

第二十二、三條 不動産ニ関スル訴訟ハ其不動産所在地ノ裁判所ノ管轄ニ屬ス

第二十三、四條 訟求ノ物件ト答弁ノ物件ト相牽連スル中ハ本訴ヲ管轄スル裁判所ニ及訴スルヲ得但其裁判所ノ裁判權ニ牴觸スル中ハ此ノ限ニマラス

第二十五條 左ノ場合ニ於テ裁判管轄ヲ定ムルノ訴訟ハ每級上等ナル裁判所ノ管轄ニ屬ス

- 一 管轄裁判所ニ於テ法律上又ハ事實上裁判權ヲ施行スル能ハサル時
- 二 裁判正ノ境界分明トササルニ因リ訴訟



三 不動産ニ関スル訴訟ニ付其物件教箇ノ  
裁判区ニ跨ルル時

四 同一ノ訴訟ニ付教箇ノ裁判所中一ノ管  
轄ニ属スルキモノヲ各其管轄ナリト判  
定シ又ハ管轄ニアラスト判定シタル時

本条ノ訴訟ハ原被對審ニ用ヒス之ヲ裁判ス  
但其裁判ニ付テハ上訴ヲ許サス

第二十六條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴訟ハ每級  
上等ナル裁判所ノ管轄ニ属スルモノ若シ教  
箇ノ治安裁判所同一ノ始審裁判区内ニア  
ルハハ控訴裁判所之ヲ定メ教箇ノ治安裁  
判所又ハ始審裁判所同一ノ控訴裁判区内ニ

アラサルハ又ハ教箇ノ控訴裁判所ノ管轄ニ  
觸ルルハ大審院之ヲ定ム

八月十二日午後會議

宮中出席

第四章

裁判所ノ管轄ニ関スル契約

第二十七條

裁判ノ管轄ハ法律ヲ以テ之ヲ定

ムトモ初告ノ訴訟ニ付テハ原被両造ノ契

約又ハ黙諾ヲ以テ之ヲ變更スルヲ得但人

事ニ関スル訴訟ハ此限ニアラス

契約ハ唇面ヲ以テ之ヲ証ス但其事件ヲ詳細

ニ指定セタル時ニアラサレハ其効ナキモノ

トス

被告人ヨリ裁判管轄ニ付異議ノ申立ヲ為シ

ス對審ヲ始メタル時ハ黙諾セタルモノトス

第二十八條

被両造ハ其訴訟ニ付始審ノ裁

判ニ對シ上訴セサルノ契約ヲ為スルヲ得

此契約ハ唇面ヲ以テ之ヲ証シ又ハ對審ノ調  
唇ヲ以テ之ヲ証スルヲ得

第五章 裁判官ノ忌避

第二十九條 原告又ハ被告ハ左ノ場合ニ於テ

裁判官ヲ忌避スルヲ得

一 裁判官原告又ハ被告ト刑法第百十四條  
第百十五條ニ定ムル所ノ親屬ナル時

二 裁判官原告又ハ被告ト權利者義務者又

ハ保証人トシテ利害ヲ共ニスル時又ハ

其他ノ原因ニ因リ訴訟ノ結局ニ關係ヲ

有スル時

八月十三日午前會議 中南部 栗城 出席

三、裁判官証人又ハ鑑定人トシテ審問ヲ受

ケタルトシテ時又ハ法律ニ定メタル代

人訴訟代人訴訟附添人ト為リ若シクハ

為リシ時又ハ曾テ裁判ヲ為シタルトシ

ル時

第三十條 原告又ハ被告ハ前條及ヒ左ノ場合

ニ於テ裁判官ヲ忌避スルヲ得

一 裁判官其擔任ノ訴訟事件ニ付原告又ハ

被告ト對話又ハ文通ヲ為シタル時

二 裁判官又ハ其同居親族ノ者訴訟事件ノ

始マリシ以來原告被告又ハ其親族ヨリ

贈物ヲ收受シ又ハ聽許シタル時

三 裁判官原告又ハ被告ト訴訟スル時又ハ  
之ト仇怨ナル時

四 前敘項ニ掲グル場合、外裁判官不公平  
ノ裁判ヲ為スヲ疑フニ足ルノ事由アル  
時

第三十條 第二十九條ノ場合ヲ除キ、外忌  
避ノ申立ハ原告被告對審前ニ之ヲ為スヘシ  
但忌避ノ理由對審後ニ生シ又ハ對審後ニア  
ラカシハ其理由ヲ知り得サリシトテ證明シ  
タルヲハ此限ニテラス

第三十條 忌避ノ申立層ニハ忌避ノ事由ヲ  
證明スヘシ  
忌避申立層ハ忌避スヘキ裁判官所屬ノ裁判

所層記局ニ差出スヘシ

第三十條 治安裁判官ニ對シタル忌避ノ申  
立層ハ其裁判所層記之ヲ受取り其裁判官ニ  
示スヘシ

裁判官忌避ノ申立ヲ相当ナリトスル時ハ其  
裁判ニ干與セサルノ事由層ヲ其申立層ニ添  
一層記局ニ出シ層記ハ其事由層ノ字ヲ忌避  
申立人ニ交付ス可シ此場合ニ於テハ他ノ裁  
判官之ニ代ヘ可シ

裁判官忌避ノ申立ヲ相当ナリトスル時ハ  
其事由層ヲ忌避申立層ヲ添一層記局ニ出シ  
層記ハ之ヲ始審裁判所層記局ニ送致ス可シ

八月十三日午後會議 中村 宮城 出席

第三十四條 始審裁判所ハ 換事ノ意見ヲ聽キ  
之ヲ判定ス一之但〇〇

忌避申立人及之治安裁判官ノ申立ニ付キ証  
據ノ并明ヲ要スルト之ヲ為シタルノ程度  
トハ該裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム  
但此判定ニ付キハ控訴ヲ許サズ

第三十五條 始審裁判所以上ノ裁判官ニ對シ  
忌避ノ申立アリタルハ其裁判所長ハ忌避ノ  
申立ヲ受ケタル裁判官ヲ以テ其申立層ニ對  
スル事由層ヲ出サシム

判定ノ手續ハ前條ノ規則ニ依ル但其判定ハ  
忌避ノ申立ヲ受ケタル裁判官所屬ノ裁判所

之ヲ為ス其裁判所ニ於テ判定ヲ為スルヲ得  
ナルハ其上等ナル裁判所之ヲ判定ス  
本章ノ判定ニ付テハ控訴ヲ許サス  
第三十六條 上等ナル裁判所ニ於テ忌避ノ申  
立ニ付判定ヲ為スルハ同時ニ管轄裁判所ヲ  
定ムルヲ得  
第三十七條 裁判官忌避ノ申立ヲ受ケタル時  
トモモ其訴訟ニ付猶豫スルカニ付條件ハ  
之ヲ知分ス可シ  
第三十八條 裁判官回避ノ申立ヲ為シタル時  
之ヲ判定スルノ手續ニ忌避ノ申立ヲ判定ス  
ルノ規則ニ依ル  
第三十九條 本章ノ規則ハ裁判登記ニモ亦之

ヲ適用スルヲ得但其判定ハ登記所屬ノ裁  
判所ニ於テ之ヲ為ス  
本章ノ規則ハ之ヲ換事ニ適用スルヲ得ス

第二編 原告被告

第一章 訴訟ノ能力

第四十條 法律ニ從ヒ其身体財產ヲ自治スル  
トヲ得ルモノハ訴訟ノ能力ヲ有ス

第四十一條 完全ナル訴訟ノ能力ヲ有セザル  
者トモモ民法法律ニ從ヒ契約ヲ為シ其義務ヲ負  
擔スルトヲ得ル者ハ其事件ニ限り訴訟ノ能  
力ヲ有ス

丁年者ノ訴訟ノ能力ハ其戸主ニ附屬スルカ

為、制限ヲ受ケル、又婦女ノ訴訟ノ能  
力ハ増進シタルカ為、ニ制限ヲ受ケル、

八月十四日午前會議 如公 南部 栗塚 中村 宮城 出席

第四十三條 官廳郡区町村社寺公舎公會銀行

無名會社及起訴ノ能力ヲ有セサル者ノ訴

訟ハ法律ニ定メタル代人<sub>ニ</sub>為ス可シ但代

理ノ委任狀ヲ要スル<sub>ト</sub>否トハ各其法律規則

ニ從フ

法律上ノ代人ハ訴訟ニ付本人ノ有スル權利

及義務アルモノトス其訴訟ニ付テノ所為

ハ此法律ニ別段ノ定メアルモノヲ除ク外本

人ト同一ノ關係ヲ有ス

法律上ノ代人訴訟ヲ為ス為ノ委任ヲ受ケ又

ハ之ヲ受ケサルモノ總テ其訴訟ニ付テノ知為

ハ其効アルモノトス但シ訴訟外ノ所為ニ付

民法ノ規則ニ從ヒ別段ノ委任ヲ受ルヲ要スルモ、ト雖亦同シ

第四十三條 外國人ハ其國ノ法律ニ於テ訴訟ノ能力ヲ有セスト雖本邦ノ法律ニ於テ訴訟ノ能力ヲ有スル時ハ訴訟ヲ為スルヲ得

第四十四條 裁判所ハ其職權ヲ以テ訴訟能力ノ完否法律上代人ノ適否委任狀ノ有無ヲ取調シ可シ

原告被告ハ其訴訟ノ能力代人ハ其代理權又ハ委任狀ノ完備セサル中ト雖モ延滞ハ為ソ損害ヲ生スヘキハ恐レル時ハ訴訟ヲ為スルヲ允許ヲ請フヲ得

前項ノ諸件完備シタル後又ハ之ヲ完備セシ

ルル為メ其ハタル猶豫ノ期限ヲ經過シタル後ニアラサレハ本案ノ裁判ヲ為スルヲ得ズ若シ其期限内ニ之ヲ完備スルヲ能ハサル時ハ原告被告又ハ代人ハ録スル者ヲ欠席者ト看做ス可シ

第四十五條 原告被告死亡スル時ハ其相續人訴訟ヲ継續ス可シ

審理ハ相續人ノ届出又ハ對手人ヨリ相續人ヲ指定シテ其相續不可ノ事實ヲ申立ルニ至ルマテ中止ス可シ

對手人ヨリ指名セラルタル者相續ヲ拒ム時ハ裁判所之ヲ判定ス可シ裁判所ハ其意見ヲ以テ本案ヲ訴訟ヲ相續ニ付テ、訴訟ニ合併



ハルコ得又ハ先ツ相續ニ付テノ訴訟ヲ裁  
判シ其裁判ノ確定スルニ至ルマテ本案訴訟  
ノ審理ヲ中止スルコトヲ得

八月十四日午後會議 宮中 出席

第四十六条 原告被告訴訟ノ能力ヲ失ヒ又ハ  
法律ニ定メタル代人死亡シ又ハ原告被告訴  
訟ノ能力ヲ得ル以前ニ代人ノ代理權消滅ス  
ル時ハ代人又ハ新代人ノ届出アルマテ又ハ  
其對テ人ヨリ之ヲ指名スルコトノ審理ヲ中止  
スヘシ

第四十七条 訴訟代人死亡シ又ハ訴訟ノ代理  
スルノ能力ヲ失ヒタル時ハ前ニ至ル規則ヲ  
適用セズ但裁判所ハ此場合ニ於テモ訴訟代  
人又ハ對テ人ノ申立ニ依リ一定ノ期限ヲ定  
メ審理ヲ中止スルコトヲ得

第四十八条 原告被告他ノ事件ニ分散ノ想

分ヲ受テ其訴訟分散ノ資額ニ關係アル時ハ  
財産管理人ノ届出又ハ其對于人ヨリ之ニ指  
名シ又ハ分散取調ヲ了ルマテ審理ヲ中止ス  
可シ

第四十九條 原告被告訴訟ノ能力ヲ有セス且  
法律上ノ代人ナク又ハ死亡之ヲ相續人ナキ  
時受許裁判所ノ裁判長ハ延滞ノ為ノ損害ヲ  
生スルコトヲ恐マル場合ニ限り其職權又ハ對  
于人ノ申立ニ依リ特別ノ代人ヲ命ズルコトヲ  
得ル代人ハ法律上ノ代人又ハ相續人ノ定マ  
ルマテ本人ノ有スル權利及ヒ義務アルモノ  
トス但裁判長ハ何時ニテモ其職權ヲ以テ特  
別ニ命ズル代人ノ委任ヲ解キ又ハ其委任

ノ終リタルモノト着做スルヲ得

九月十三日午前會議  
南部栗塚中村宮城  
出席

八月十五日午前會議

南部栗塚  
中村宮城 出席

第二章 共同ノ訴訟

第十一條 左ノ場合ニ於テハ二名以上同一ノ訴訟ニ付原告トナリ又ハ被告トナルヲ得

- 一 訴訟物件ニ付共同ノ權利義務ヲ有スル時
- 二 權利義務ノ原因事實又ハ法律ニ於テ同一ナル時
- 三 訴訟ノ目的同種ノ權利義務ニ関シ且其權利義務ノ原因事實上又ハ法律上ニ於テ同一ナル時

第十二條 共同訴訟人共ニ訴ヲ起サス又ハ共ニ訴ヲ受ケ  
タル時被告ニ於テ答辯ヲ拒絶シ得ルヤ否ハ民法ノ規則ニ從フ

第十三條 共同訴訟人ヨリ對手人ニ對スル各自ノ所為ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及サ、ルモノトス

第十四條 共同訴訟人連帯、権利義務ヲ有スル時、前條ノ規則ヲ適用ス可カラズ此場合ニ於テ共同訴訟人中對于人ニ對シ抗論スルモノアルハ他ノ訴訟共同訴訟人悉ク抗論スルモノト見做スヘシ又共同訴訟人中期日ニ闕席シタルモノアルハ他ノ出席セサルモノヲ以テ其代人ト見做スヘシ又共同訴訟中上訴スルモノアルハ其利益ニ上訴セサルモノニ及フヘキモノトス

第三章 參加ノ訴訟

第十五條 他人ノ争訟スル物件又ハ權利ノ全部又ハ一部ニ関シ自己ノ權利ヲ伸暢セシ

ト欲スル者ハ本案ノ裁判確定ニ至ルマテ原告被告双方ニ對シ其訴訟ニ參加スルヲ得但シ本案ノ原告被告ハ參加人ニ對スルモノトス  
前項ノ場合ニ於テ裁判所ハ其職權又ハ原告被告一方ソ甲立ニ依リ參加ノ訴訟ニ付シノ裁判確定スルニ至ルマテ本案ノ審理ヲ中止スルヲ得  
第四條 原告被告一方ノ勝訴又ハ敗訴ニ因リ法律上ノ利害ヲ有スル者ハ其一方ヲ補助スル爲メ訴訟ニ參加スルヲ得

八月十五日午後會議 宮城 出席

第五條 補助參加ハ層面ヲ以テ之ヲ為ス

一 其層面ニハ左ノ事項ヲ記載ス

一 原告被告又ハ法律ニ定メタル代人ノ住

所職堂身分氏名

二 參加人ノ受リヘキ利害

三 參加ノ申立

其他ノ案件ハ層類ニ關スル一般ノ規則ニ從

フ

層面ノ厚ハ原告被告相方ノ人算ニ應ニ調成ス

可シ

第六條 原告被告ノ一方參加ヲ拒ム可ハ裁

判断ハ之ヲ議決ス

参加人ハ其議決スル迄参加ヲ継続スルヲ  
得但此議決ニ付テハ之ヲ争フルヲ得ス

八月十六日午前會議

湖公 南部 栗塚  
中村 宮城

出席

第五十七條

補助参加ハ本案ノ裁判確定スル

ニ至ルマテ何時ニテモ其裁判所又ハ上訴ヲ

為シタル裁判所ニ之ヲ為スルヲ得

補助参加人ハ本案ノ審理中参加スル場合

於テハ其訴訟ノ現状ノ終参加又可キモノト

ス但其弁論及ヒ所為ト本人ノ弁論及ヒ所為

ト矛盾セカニ限リハ隨意ニ之ヲ為スルヲ得

若シ矛盾スル時ハ本人ノ弁論又ハ所為ニ依

ル可シ

第五十八條

補助参加人ト本人トノ關係ハ裁

判官ニ記載セカニモノトス但参加人ノ氏名

及ヒ参加ノ事項ハ之ヲ記載ス可シ

裁判所参加人ヨリ其補助シタル原被告ノ目  
己ノノ關係ニ付訴訟ノ裁判ヲ不当ナリト申  
立ルモ之ヲ採用セサルモノトス但シ参加人  
ヨリ原被告ノ為シタル訴訟ニ瑕疵アリト申  
立ル場合ニ於テ其参加ノ時ノ訴訟現状又ハ  
原被告ノ舉動ニ因リ攻撃若クハ防禦ノ方法  
ヲ用ニルヲ得ナリト又ハ原被告ノ故意若  
クハ重大ノ過失ニ因リ参加人ノ知ラザル攻撃  
若クハ防禦ヲ用ヒナリトノ判然タル時ハ  
裁判所其申立ヲ採用スヘシ  
第五<sup>二</sup>十九<sup>一</sup>条 補助参加人ハ訴訟人ノ承諾ヲ得  
テ本人ニ代リ訴訟ヲ擔當スルヲ得此場合  
ニ於テ本人ハ自己ノ申立ヲ以テ訴訟ヲ脱ス

ルヲ得但其裁判ハ訴訟物件ニ付本人ニ對  
シ効力ヲ有スルモノトス  
第六<sup>二</sup>十<sup>一</sup>条 原告又ハ被告其訴訟ノ失敗ニ至ル  
ニ於テハ第三者ニ對シテ擔保若クハ弁償セ  
シムルノ請求ヲ為スヲ得ヘキモノハ思量ス  
ル時又ハ第三者ヨリ請求ヲ受クヘキノ恐レ  
アル時ハ裁判確定ニ至ルマテ第三者ニ對シ  
テ訴訟ヲ告知スルヲ得

八月十六日午後會議

中村 出席

第六<sup>三十三</sup>條

訴訟ノ告知ハ昏面ヲ以テ之ヲ為

ス可シ其昏面ニ在ノ事項ヲ記載ス可シ

一 原告被告又ハ法律ニ定メタル代人ノ住

所職業身分氏名

二 訴訟ノ現状

三 訴訟告知ノ理由及ヒ自己ニ補助スル為

メ參加セシムルノ要求

第六<sup>三十四</sup>條

訴訟ノ審理ハ告知ヤリタルカ為

メ之ヲ中止セス

第三者訴訟ノ告知ヲ受ケタルモ之ニ應セズ

又ハ之ヲ拒ム時ハ裁判所ハ之ニ拘ハルナ

ク審理ヲ延滞ス可シ



第三者訴訟ニ参加スルヲ承諾スル時ハ原告又ハ被告ニ對スル關係ハ補助参加ノ規則ニ從フ但第五十七條ノ場合ニ於テハ其参加シタル時ヲ以テ参加ノ始ト爲スト虽モ本項ノ場合ニ於テ訴訟ノ告知ニ因リ参加ニ得ルキ時ヲ以テ参加ノ始トス

第三者参加スル時ハ其補助シタル原告敗訴シタル場合ニ於テハ之ヲ保証シ又ハ弁償スルノ義務アルヲ認諾シタルモノト看做ス可カリ

第六十三條 原告被告ハ如何ナル場合ニ於テ第三者ニ訴訟ヲ告知スルノ義務ヲ有スルヤ否ハ民法及ヒ此法律ノ規則ニ從テ可キ者トス

原告被告法律上ノ義務ニ及ビ訴訟ヲ告知セザル時ハ第三者訴訟ノ告知ヲ受ル場合ニ於テ其對手人ニ對シ提供ス可キ事實及ヒ立証方法ヲ自カニ提供セサル可キ

第六十四條 不動産不動産賃借ノ契約又ハ附託善クハ管理ノ契約又ハ其他ノ原因ニ因リ物件ヲ保有スル者被告トナリタル場合ニ於テ其所有者タル第三者ヲ指谷シ且之ニ訴訟ヲ告知シタル時ハ本案ノ審理ヲ拒ムコトヲ得

第六十一條ノ規則ニ從テ第三者ニ告知スルハ各面ニ其到達ノ日ヨリ七日以内ニ意見ヲ陳述スルコトヲ旨ヲ記載スル若シ第三者意見見ヲ陳述セズ又ハ被告ノ保有スル物件ノ所

有ニテスル陳述スル時ハ被告ハ隨意ニ本  
訴ノ答弁ヲ為スルヲ得

第三者被告ノ保有スル物件ノ所有者ナリト  
陳述スル時ハ本訴ニ参加シ又ハ被告ノ承諾  
ヲ得テ一人ニテ訴訟ヲ擔當スルヲ得但原  
告ヨリ被告ニ對シ收獲物ノ附與損害ノ賠償  
其他被告ノ保有スル物件ノ所有權ニ關セテ  
ハ請求ニ係ル時ハ原告ノ承諾ヲ要ス  
第三者一人ニテ訴訟ヲ擔當シタル時ハ被告  
ハ自己ノ申立ヲ以テ其訴訟ヲ脱スルヲ得  
但其裁判ハ訴訟物件ニ付被告本人ニ對シ効  
力ヲ有スルモノトス

第三條 被告ハ第三者ノ各ヲ以テ為シタ

ル獨斷ノ所為ヨリ生シタル損害ノ賠償又ハ  
其所為ノ取消又ハ其所為ノ再行ヲ防止スル  
ハ請求セラレタル時ハ前條ノ規則ニ從フ但  
被告ノ惡意ノ所為ハ此限ニテテ又

九月十日午前會議 御公 南部 栗塚 中村 宮城 出席

第四章 訴訟代人及ヒ附添人

第六<sup>ノ</sup>十六<sup>ノ</sup>條 訴訟本人及ヒ其法律上ノ代人ハ

民法ノ規則ニ牴觸セザル限リハ訴訟代人ヲ

差出ニ若クハ附添人ト共ニ出廷スルヲ得

公權ヲ具有スル丁年男子ハ訴訟代人及ヒ附

添人アルヲ得但代言人ニアラザルハ訴訟代

人及ヒ附添人ハ其給料ニ就テ裁判所ニ訟求

スルヲ得ス

第六<sup>ノ</sup>十七<sup>ノ</sup>條 訴訟代人代理ヲ委任セラレタル

丁ヲ委任状ニ依テ証明ス可ニ但其委任状ハ

訴訟書類ニ添附ス可キモノトス

口頭對審ノ際又ハ代審裁判官若クハ受託裁

判所ノ前ニ於テ口頭ヲ以テ委任ヲ為シタル  
時ハ委任状ヲ文附シタルモノニ同シ  
第六<sup>三</sup>十八條 訴訟代理ノ委任ハ其事件ニ関ス  
ル訴訟上ノ處置及ヒ及訴訟中止シタル訴訟ノ  
繼續強迫執行ヨリ生スル處置ヲ包含シ又自  
己ノ為メ代人ヲ任シ裁判所ニテ和解ヲ取結  
シ訴訟物件ヲ拋棄シ對手人ノ要求ヲ承認シ  
其他對手人ヨリ支辨ス可キ訴訟費用ヲ領収  
スル<sup>一</sup>ヲモ包含ス但訴訟物件ヲ領収スル<sup>一</sup>  
ハ之ヲ包含セス  
本訴ノ代理委任ハ當然ニ第三者ノ參加假處  
分及ヒ財産差押ヘニ関スル訴訟手續ヲモ包  
含スルモノリス

代人数名アル時ハ各別又ハ共同ニテ代理ヲ  
為ス<sup>一</sup>ヲ得  
前數項ニ抵觸シタル契約ヲ為スモ委任状ニ  
明記シアルニテアラサレハ對手人ニ對シ其効  
ナキモノリス

第六<sup>三</sup>十九條 訴訟代人前條ノ規則ニ從ヒ權限  
内ニ於テ為シタル限リハ其處分及ヒ怠慢ハ  
本人ノ處分及ヒ怠慢ト同一ノモノリス  
代人ノ白狀其他事實上ノ陳述ハ其代人ト共  
ニ出廷シタル本人ヨリ即時取消シ若シクハ  
正誤シタル時ハ其効力ヲ失フモノリス  
第七<sup>三</sup>十條 訴訟本人死亡シ又ハ本人起訴ノ能  
力若シクハ法律上ノ代理ニ就キ變更アリタ

ルモ代理ノ委任ハ為メニ消滅セサルモノト  
ス  
訴訟本人又ハ其權利相續人ヨリ代理ノ解除  
及ヒ代人ヨリ為ス代理ノ辞退ハ之ヲ裁判所  
ニ届出タル上ニアラサレハ對手人ニ對シ其  
効ナキモノトス其届出タルマデハ代人ニ對  
シ当然昏類ノ送達ヲ為スヲ得  
代理ヲ辞退シタル代人ハ本人他ノ方法ヲ以  
テ自己ノ權利ヲ保護スル用意ヲナシタルカ  
又ハ其用意ヲ為シ得ルニ至ルマデハ依然代  
理ノ權利及ヒ義務アルモノトス  
代人死セシ又ハ代理ノ能力ヲ失ヒタル時ハ  
本人自ツカラ又ハ他ノ代人訴訟ヲ継續スル

マテ審理ヲ中止ス可シ其期限ハ裁判所之ヲ  
定ムルモノトス

### 第七十三條

一訴訟ニ限ラス總テノ訴訟若シ  
クハ定マリタル種類ノ訴訟ニ関スル代理ニ  
就テハ前數條ノ規則ヲ適用ス可シ

他ノ代理契約ニ於テ總テノ訴訟事件若シク  
ハ定マリタル種類ノ訴訟ニ付民法ニ從ヒ代  
理スルノ推アル時亦前項ニ同シ但此場合ニ  
於テ其代人ハ代理ノ契約昏ヲ攜帶ス可シ  
一訴訟中一二ノ事項ニ限りタル代理ノ委任  
ハ其委任狀ニ明記シタル事件ノ外ニ及ホス  
トヲ得ス

九月十日午後會議

榎林宮城出席

第七<sup>三十四</sup>條

代理委任状中ニ欠漏アル時若シ

其代人代言人ナル時ハ裁判所ニ職務上之ヲ

詰責スルノ権利アリ又其代人代言人ニアラ

サル時ハ職務上之ヲ詰責スルノ義務アリト

ス

對手人ハ前項ノ場合ニ於テ訴訟中何時ニテ

モ詰責ヲ為ス<sup>テ</sup>ヲ得

詰責スルモ尚ホ其欠漏ヲ補ハサル時ハ其訴

訟本人ノ出席セサル者ト者做ス可シ

委任状ヲ有セス又ハ之ヲ有スルモ其完全ナ

ラサル時ハ状況ニ依リ裁判所意見ヲ以テ訴

訟費用及ヒ損害賠償ノ保証ヲ立シメ又ハ之

ヲ立シメスレテ及ニ代人ト認ルルヲ得但妻  
任状ノ欠席ヲ補ヒタルカ又ハ其補充ノ期限  
経過シタル後ニアラサレハ本案裁判ヲ為ス  
可カラス若シ其欠漏補充ノ期限ヲ空ク経過  
シタル時ハ其訴訟本人ニ對シ欠席裁判ノ手  
續ヲ為ス可キモトス

第七十三條

訴訟本人ト共ニ出定シタル附添  
人ノ供述ハ本人ヨリ即時之ヲ取消シ又ハ三  
誤スルニアラサレハ本人ノ供述ト首做ス可  
シ

九月十一日午前會議

御公 南部 宮城 中村

出席

第五章 訴訟費用

第七十四條

訴訟上一切ノ費用ハ其事件ニ於  
テ曲者トナリタル者之ヲ負擔スルヲ例トシ  
直者ノ支出シタル費用ハ裁判所ニテ攻撃又  
ハ辯護ノ為ニ必要ナリト認メタル者ニ限リ  
曲者ヨリ辯償ス可シ  
直者ト使用シタル代言人ノ給料及ヒ實費ハ  
毎ニ辯償ヲ請求シ得ヘキ費用中ニ屬スルモ  
ノトス若シ直者其裁判所々在地外ノ代言人  
ヲ使用シタル時旅費ハ其代言人ノ使用ヲ裁  
判所ニテ必要ナリト認メタルモノニ限リ曲  
者之ヲ辯償ス可シ

二名以上ノ代言人ヲ同時ニ使用シタル場合  
ニ於テ其費用ハ一名ヲ使用シタル費用ノ高  
ヲ限リトシ又二名以上ノ代言人ヲ前後相次  
ク使用シタル場合ニ於テ其費用ハ代言人ノ  
更迭ヲ必要若シクハ便宜ナリト認メタル時  
ニ限リ之ヲ辨償セシム可シ但其訴訟事件ヲ  
更ニ上等ノ裁判所ニ提出スルニ際シ以前ノ  
代言人ヲ雇継カントセハ其旅費却テ新代言  
人ノ費用ヨリ嵩ム可キ場合ニハ代言人ノ連  
送ヲ便宜トスルノ事由存スルモノトス  
共同訴訟人各自ニ代言人ヲ使用シタル時ハ  
事實果シテ必要ナリシヤ否本人訴訟代人ト  
共ニ期日ニ出廷シタルハ充分ノ理由アリシ

ヤ否立証ノ費用殊ニ証人ヲ差出シタル費用  
ハ必要ナリシヤ否其他都テ弁償ヲ請求スル  
為ノ計算ニタル費用ハ相当ノ支出ナリシヤ  
否ヲ定ムルハ裁判所ノ意見ニ任ス  
第七十五條 原告互ニ曲直アル時ハ裁判所  
ノ意見ヲ以テ其費用ヲ相除又ハ分擔セシム  
可シ  
費用ヲ相除ス可キ場合ニ於テハ各自支出ノ  
費用ヲ擔當シテ且ニ其弁償ヲ請求ス可カラ  
ズ費用ヲ分擔ス可キ場合ニ於テハ裁判所ニ  
テ其金額ヲ折半シテ之ヲ各自ニ分擔セシメ  
又ハ一方ニ幾分ヲ課シ他ノ一方ニ殘餘ヲ負  
擔セシム可シ



原被告互に曲直アル場合ト雖も一方ノ請求  
價額<sup>格</sup>外外に不相当ニアラス且別段ノ費用ヲ  
生セサル時又ハ裁判官ノ見積鑑定人ノ鑑定  
若シクハ相互ノ計算ニ依テ請求額ノ定マル  
可キ時ハ裁判所ハ他ノ一方ニ一切ノ費用ヲ  
負擔セシムル可シ

第七<sup>三</sup>十<sup>六</sup>條 被告ニ於テ原告ノ要求ヲ認諾シ  
且論争遲滞等ニ因テ訴訟ニ及ハシメタルニ  
アラサレハ原告ハ直者ト為リタルニ拘ラヌ  
一切ノ訴訟費用ヲ負擔ス可シ

第七<sup>三</sup>十<sup>七</sup>條 過失ノ有無ヲ問ハヌ期日若シク  
ハ期限ヲ過シ又ハ過失ニテ期日若シクハ對  
審ヲ延ハシ又ハ對審繼續ノ為メ更ニ期日ヲ

設ケ若シクハ期限ヲ延ハシタル等都テ過失  
ニテ裁判ヲ遅滞セシメタルカ為メ生シタル  
費用ハ其自己ニ係ルト對手人ニ係ルトヲ問  
ハヌ又曲者若クハ直者トナリタルトヲ論セ  
ス之ヲ擔當ス可シ  
無効ニ歸シタル攻撃又ハ辯護ノ方法ヨリ生  
シタル其費用ハ此方法ヲ用ヒタル者ノ案ニ  
於テ直者ト為リタルニ拘ハラヌ裁判所ノ意  
見ヲ以テ之ニ負擔セシムルヲ得

九月十一日午後會議

中村 出席

第七、十八條

無効ニ帰シタル上訴ノ費用ハ其

上訴ヲ為シタル者之ヲ負擔ス可シ

上訴ノ為メ原裁判ノ變更若シクハ破毀セラ

レタル時ハ原裁判ノ費用ニ関スル判決亦消

滅スヘキモノトス此場合ニ於テハ各裁判ノ

訴訟費用ノ合一ニ前數條ノ規則ニ從ヒ更ニ

裁判ヲ為ス可シ

控訴ノ時新タニ攻撃并護ノ方法ヲ提出シ直

者トナリタル者ニ對シ裁判所若シ此方法ヲ

初審ニ提出シ得ヘカリニモノト認ムル時ハ

控訴費用ノ全部又ハ幾部ヲ直者ニ負擔セシ

ムルヲアル可シ

第三編 訴訟法 第四編 訴訟

司法省

換事ヨリ為レタル上訴ノ却下セラレタル時  
其上訴ノ為ノ生シタル必要ノ費用ハ官廳ヨ  
リ辨償ス可シ

第七十九條 原告和解シタル時其訴訟費用  
ハ和解ニ付キ生シタル費用ト共ニ相除シタ  
ルモノト看做ス可シ但別段ノ契約アル時ハ  
此限ニアラス

第八十條 共同訴訟人訴訟費用ヲ負擔ス可キ  
時ハ各自同一ノ割合ヲ以テスルヲ例トス  
共同訴訟人其訴訟ニ関スル利害ニ著シキ差  
等ナル時ハ裁判所ノ意見ヲ以テ其利害ノ輕  
重ヲ斟酌シテ費用ヲ分擔セシムルヲ可  
シ

共同訴訟人中ノ一名別段ナル攻撃又ハ辨護  
ノ方法ヲ用ヒタル時其一名ニテ費用ヲ負擔ス  
可シ

民法ノ規則ニ從ヒ連帶ノ義務アル時ハ共  
同訴訟人ハ訴訟費用ニ付連帶ノ義務アルモ  
トス

九月廿二日午前會議

南部 栗塚  
中村 宇城

出席

第八十三條

補助参加及び訴訟ノ告知ヲ得テ

為ス参加ノ費用ニ付テハ第七十四條ヨリ第

七十九條マテノ規則ヲ適用ス可シ但其費用

ハ他ノ一方ヨリ参加ニ付故障ヲ申立タル時

参加ノ許否ヲ判定スルノ費用ヲモ包含スル

モノトス

第八十四條

訴訟費用負擔ノ義務ニ付テハ原

被告ノ請求ナシト虽モ裁判所之ヲ判決ス可

シ但其判決ニ對シテハ費用ノ負擔者若クハ

對手人ヨリ本案ノ上訴ヲ為シタル時ニテ

サレハ之ヲ争フコトヲ得ス

第八十三條

裁判所登記便更法律上ノ代人代

第三編 訴訟法 第四編 民事

司法省

言人及訴訟代人重キ過失ニ因リ避ケ得可キ  
費用ヲ避ケサリシ時訴訟本人ノ請求ナシト  
モ裁判所其職権ヲ以テ費用ノ弁償ヲ命ス  
ルトアル可シ其命令ニ直ニ執行スヘクシテ  
之ヲ争フト得サルモノトス但命令ヲ下ス  
ノ前關係者ニ口頭又ハ書面ヲ以テ陳述ヲ為  
スト得セシム可シ

第八十四條 訴訟費用ノ弁償ハ確定裁判又ハ  
仮リニ執行ス可キ判決ヲ以テ其負擔ヲ言渡  
シタルカ其他執行命令ノ書面アルニ非シハ  
原告ノ請求スルヲ得ス  
弁償金額ヲ定ムルニ付テハ諸類ハ初審裁判  
ヲ考シタル裁判所ニ之ヲ為ス可シ其諸願者

ニハ費用ノ計算各對手人ニ交附ス可キ計算  
書ノ謄本及ヒ各費目ノ証書ヲ添附ス可キモ  
ハトス但訴訟各類ニ依リ明瞭ナル費目ハ別  
ニ証書ヲ添フルヲ要セス

弁償金額ヲ直ニ定ム可キヤ又ハ對手人ヲ  
シテ諸願者ノ計算書ニ付キ陳述ヲ為カシ  
タル上定ムヘキヤハ裁判所ノ意見ニ任ス若  
シ對手人ノ申立アル時ハ更ニ期日ヲ定メ對  
審ヲ開クトアル可シ

第八十五條 原告被告双方ニテ訴訟費用ヲ分擔  
ス可キ時裁判所ハ諸願者ノ對手人ニモ費用  
得但ニ其決議ハ仮リニ執行スルト得ヘシ

ノ計算昏ヲ七日内ニ差出サシノ辨償金額ヲ  
定ム可シ對手人若シ七日内ニ之ヲ出サ、ル  
時ハ其費用ノ幾許ナルヲ問ハス請願者ノ  
要求金額ヲ定ム可シ但對手人ハ其費用ヲ以  
テ他日請願者ニ對シ辨償ヲ請求スルヲ得  
第<sup>四</sup>十六章 無資力者ノ扶助  
第<sup>四</sup>十六條 訴訟費用ヲ負擔スルカ爲メ一身  
及ヒ家族ノ必要ノ生計ヲ支フルヲ能ハサル  
者ハ原告被告ヲ問ハス其費用支辯ノ猶豫ヲ  
請求スルヲ得但一時ノ激怒ヨリ訴訟ヲ起  
シ若クハ強テ辯護ヲ爲ス者又ハ訴訟辯護ノ  
到底無益ナルヲ判然タル者ハ此限ニアラズ  
對手人ノ費用ヲ負擔ス可キ義務ハ費用支弁

ノ猶豫ヲ得ルニ因テ變セサルモノトス  
外國人ハ其國ニ於テ本邦人ニ對シ同様ノ取  
扱ヲ爲ス時ニ限リ猶豫ヲ得セシムルヲ得  
第<sup>四</sup>十七條 支辯猶豫ノ請願者ハ請願者住地  
ノ警察署ノ證昏ヲ添ヘ受訴裁判所ノ檢事ニ  
差出ス可シ其証昏ニハ請願者ノ身分職業及  
ヒ家族財産ノ關係其直税ノ額ヲ記シテ訴訟  
費用ヲ支弁スル資力ナキヲ証明スルモノ  
トス  
請願者ニハ訴訟ノ要領及ヒ立証ノ方法ヲ略  
記ス可シ  
第<sup>四</sup>十八條 檢事請願ヲ相当ナリトスル時ハ  
請願者ニ支弁猶豫ノ免狀ヲ下附シ請願者ハ

之ヲ裁判所ニ差出入可シ

檢事ハ重要ナル事件殊ニ親族ノ權利ニ関ス

ル訴訟ニ付テハ無資力者ノ請願ニ依リ假リ

ニ報酬ナク代理人ヲ付ス可キトテ先許スル

トテ得共場合ニ於テ受訴裁判所ノ裁判長ハ

代言人中ヨリ之ヲ命ス可シ此代言人ハ無資

力者ヨリ與フル委任状及ヒ其指示ニ依リ訴

訟事件ヲ取扱フノ義務アルモノトス

第<sup>五十九</sup>條 支弁猶豫ノ特許ハ強迫執行マテ

其効アルモノトス但檢事ハ特許ノ條件初ヨ

リ存セサレシト知レタル時又ハ存セタル

モ中途ヨリ消滅シタル時ハ何時ニテモ其旨

ヲ無資力者及ヒ受訴裁判所ニ申告シテ特許

ヲ取消スルヲ得

支弁猶豫ハ本人ノ死亡ニ因テ自カラ消滅ス

ルモノトス其相續人之ヲ受ケントスルニハ

更ニ請願ス可シ

第<sup>六十</sup>條 無資力者ノ對手人訴訟費用ヲ負擔

ス可キノ言渡ヲ受ケタル時ハ無資力者ノ猶

豫サレタル裁判費用ヲ其對手人ヨリ取立ル

トテ得無資力者ノ代言人モ亦其給料及ヒ實

費ヲ敗訴者ニ對シ要求スルトテ得但無資力

者ノ對手人ニ於テ其費用ヲ相殺シ得可キ時

ハ此限ニアラス

第<sup>六十一</sup>條 支弁猶豫ヲ得タル者ハ其一各及

ヒ家族ノ生計ヲ支ヘ得可シト檢事ニ於テ認

定シタル時直ニ其猶豫サレタル費用ヲ追弁  
スルノ義務アルモトス

八月十八日午前會議

知公 南村 宮城

出席

第三編 訴訟通則

第一章 裁判公行及ヒ訟廷取締

第一條 訟廷辯論及ヒ裁判言渡ハ之ヲ公行ス

第二條 婚姻ニ關スル訴訟又ハ白痴瘋癲者ノ

治産ヲ禁スルニ付テノ訴訟ハ辯論ヲ公行ス

ルヲ得ス

一般ノ秩序又ハ風俗ヲ害スルノ恐アル訴訟

ノ裁判所ノ職權ヲ以テ辯論ノ全部又ハ幾部

ヲ公行セサルヲ得

裁判言渡ハ如何ナル場合ト至之ヲ公行ス

第三條 幼者及ヒ公權ヲ施行スルヲ得サル

者又ハ裁判所ノ尊嚴ヲ汚ス可キ者ハ訟廷ニ



入ルヲ禁スルヲ得ル可シ

裁判長ハ辯論ヲ公行セザル時ト至モ特定ノ人ニ限り訟廷ニ入ルヲ許スルヲ得

第四條 裁判長ハ訟廷ノ靜謐ヲ維持スル為メ相當ノ處置ヲ為ス可シ

第五條 原告被告其他訴廷ニ在ル者靜謐ヲ維持スル為メ發シタル命令ニ服從セズ又ハ弁論ヲ妨碍スルヲアル時ハ裁判所之ヲ退廷セシメ又ハ留置スルヲ得但留置ハ二十四時間ヲ過クルヲ得ス

靜謐ヲ維持スル為メ弁論ニ干與スル者ヲ退廷セシメタル場合ニ於テ對手人ノ申立アル時ハ自己ノ請求ニ因リ退廷シタルモノト見

做スルヲ得

第六條 裁判所ハ訟廷ニ於テ不敬ノ所為アル者ニ對シ五拾錢以上拾圓以下ノ罰金又ハ三日以下ノ拘留ヲ言渡スルヲ得但此言渡ヲ受クルト至モ其所為刑法ニ觸ル、時ハ刑事ノ処分ヲ免カル、ヲ得ス又代言人ハ其懲罰例ヲ免カル、ヲ得ス

前項ノ場合ニ於テ書記調卷ヲ作り裁判長直チニ其言渡ヲ執行セシム可シ但其言渡ニ對シテ故障及ヒ控訴ヲ許サス

第七條 訟廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ裁判所ハ事實ヲ証明シ其調卷ヲ管轄官吏ニ送付ス可シ但必要ノ場合ニ於テハ彼ニ本人ヲ留

置スルヲ得

第八條 裁判官訟廷外ニ於テ職務ヲ行フ時亦兼  
一條ヨリ第七條マテニ定メタル權ヲ有スル  
モノトス

第二章 裁判所ノ用語

第九條 裁判所ニ於テ用フ可キ言語ハ日本語  
タル可シ

第十條 辯論ニ関與スル者ノ中日本語ニ通セ  
サル人アル時ハ通事ヲ用フ可シ但外國語ヲ  
以テ別ニ調合ヲ作ルヲ要セズ  
辯論ト與人悉ク外國語ニ通スル時ハ通事ヲ  
用フルニ及ハス

八月十八日午後會議 中村 宮城 出席

裁判所ニ於テ調合中ニ外國語ヲ記載スルヲ  
必要ト認メ外國語ヲ記載シタル時ハ通事ノ  
譯シタル譯文ヲ添フ可シ若シ此規則ニ背キ  
タル時ハ記載ノ効ナキモノトス

第十一條 辯論ト與人聲又ハ啞ニシテ文字ヲ  
解セサル時ハ通事ヲ用フ可シ

第十二條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ  
為ス可シ

第十三條 外國語ニ通シタル裁判所書記ハ通  
事ヲ擔当スルヲ得此場合ニ於テハ宣誓ヲ  
要セズ

第三章 裁判所書類

第十四條

官吏ノ作ル可キ各類ハ其所屬官署  
ノ印ヲ用ヒ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名  
捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署ノ印ヲ用  
フルヲ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載  
ス可シ

官吏ニ非サル者ノ作ル可キ各類ニハ本人自  
ラ署名捺印ス可シ若シ署名スルヲ能ハサル  
場合ニ於テハ其事由ヲ各面中ニ記載シテ捺  
印ス可シ但官吏ノ面前ニ於テ作りタル場合  
ヲ除クノ外立會人ヲシテ代替セシノ其事由  
ヲ記載セシム可シ  
官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ関スル書類ノ  
正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ヲ改竄ス可

カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時  
ハ之ニ認印ス可シ文字ヲ削除スル時ハ之ヲ  
読得ヘキ為メ字体ヲ存シ其数ヲ記載ス可シ  
此規則ニ背キタル時ハ其變更増減ノ効ナカ  
ル可シ

八月十九日午前會議

中南部 栗塚 宮城 出席

第四章 書類送達

第十五條 呼出狀裁判官令書報知書其他之  
書類又ル書類ハ書記之ヲ寫シ又ハ之ヲ作り  
其送達スヘキ者ハ其送達ヲ命ズヘシ但別段

ノ法律アル者ハ此限リニマラス

第十六條 原告被告ハ對手人ニ對スル官面ニ

要數ノ謄本ヲ添ヘ書記局ニ出スヘシ書記ハ

謄本ノ不足スル時ハ原告被告ヨシテ其不足ノ

負數ヲ出サシメ又至急ヲ要スル場合ニ於テ

ハ其職權ヲ以テ謄本ヲ作ラシメ其費用ハ之

ヲ本人ヨリ徴収スルヲ得原告被告要數ノ謄本

ヲ出サシムル時ハ書類送達ニ延滞ニ付テ故障

ヲ申立ルヲ得ス

第十七條 原告又ハ被告其訴訟ヲ為ス裁判所  
マ在ノ地ニ住居セサル時ハ其所在地ニ止宿  
所ヲ定メ又ハ送達各類ノ受取人ヲ定メ之ヲ  
昏記局ニ届置クヘシ若シ届ケ置カサル時ハ  
昏類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得  
ス

第十八條 昏記ハ左ノ場合ニ於テ各其規則ニ

從ヒ昏類ノ送達ヲ命スヘシ

- 一 起訴ノ能力ヲ有セサル原告又ハ被告ニ  
付テハ法律上ノ代人ニ送達スヘシ
- 二 官廳郡區町村社寺公會銀行無名會  
社ニ付テハ其主長又ハ理事者ニ送達ス

ハシ

- 三 法律上ノ代人又ハ主長理事者數名アル  
時ハ其一名ニ送達スヘシ
- 四 陸海軍隊附現役ノ下士官又ハ兵卒ニ付  
テハ其直接ノ長官ニ交付スヘシ
- 五 原告被告總理代人又ハ支配人アル時ハ  
之ニ送達スルヲ得
- 六 原告被告訴訟代人ヲ出シタル時ハ之ニ  
送達スヘシ

第十九條 書類ノ送達ハ使吏ヲシテ之ヲ為サ

シムヘシ

書記ハ送達書三副ニ通テ作り送達ヲ受クヘ  
キ者ノ住所及ヒ送達スヘキ書類ノ復數ヲ記

載ニ其書類ト共ニ之ヲ渡スヘシ

第二十條 使吏ハ左ノ規則ニ從ヒ送達ヲ為ス

ハシ

一 送達書類ハ如何ナル場所ヲ問ハズ送達  
書受取人ニ遭ヒタル所ニテ之ヲ渡スト  
得

八月十九日午後會議 中村 宮城 出席

二 送達書類ニ受取人在宅セサル時之ヲ同

居ノ親族又ハ雇人ニ渡スヘシ

三 官廳郡區町村社寺公舎公會銀行與谷會

社ノ主長又ハ理事者ニ送達スヘシ送達

書ハ一定ノ事務所トキ時之ヲ其住所ニ

送達スヘシ

四 本住所外別ニ出張所ヲ設ケ營業ヲ為ス

者ハ其出張所ニ送達ス可シ

第二十一條 使吏ハ送達書ヲ受取リタル者ヲ

シテ其送達書ノ正副ニ通シ署名捺印セシム

ヘシ若シ署名捺印スル不能ハ廿ル時ハ其首

ヲ附記スヘシ

第二十条 規則ニ從ヒ送達ヲ為スルヲ得又  
又ニ受取人送達昏ヲ受取ルルヲ肯セサル時  
ハ其地ノ戸長役場又ハ區役所ニ渡シ置戸長  
又ハ區長ハ其昏類ニ認印シ本人ニ送達スル  
ノ手續ヲ為ス可也  
使吏ハ送達昏類ヲ取リタル者ノ氏名場所  
及ヒ其日時ヲ送達昏類ノ正副二通ニ記載シ  
其正本ヲ昏記局ニ還納シ昏記ハ送達ノ証ト  
シテ之ヲ保存ス可也  
第二十二條 日出前日没後ハ昏類ノ送達ヲ十  
ス可カラズ但亦人承諾シテ受取ル時ハ此限  
ニテラス  
休暇ノ日ハ至急ヲ要スル場合ニ限り裁判所

ノ允許ヲ以テ昏類ヲ送達スルヲ得  
第二十三條 昏記其裁判所ニ在地外ニ昏類ヲ  
送達セシムルハキ時ハ受取人居住ノ最近ノ裁  
判所昏記ニ囑託シ其附屬ノ使吏ヲ以テ送達  
セシムルヲ得  
使吏之ヲ送達シタル時ハ其送達昏ノ正本ヲ  
囑託ヲ受ケタル昏記ヨリ囑託シタル昏記ニ  
還附スルニ  
第二十四條 外國ニ送達スルハキ昏類ハ司法卿  
ヲ經テ其國ノ相當官衙若クハ其國駐劄ノ本  
邦公使ニ囑託シテ本人ニ送達スルニ又ハ兵營  
外ニ屯在セル軍隊若クハ艦装シタル軍艦ニ  
屬スル者ニ送達スルハキ書類ハ其者ノ本屬官

廳ニ囑託シテ本人ニ送達スヘシ  
囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ハ送達シタル  
トヨ報告スヘシ

第五章 期限

第二十五條 裁判所ハ期限ヲ定ムルニ日時ヲ  
以テス

訟廷ニ於テ期限ヲ定メ之ヲ告知シタル時ハ  
在廷シタル者ニ對シ別ニ呼出狀ヲ発スルヲ  
要セス

第二十六條 期限ヲ計算スルニ時ヲ以テスル  
モノハ即時ヨリ起算ス日ヲ以テスルモノハ  
初日ヲ算入セス又最終ノ日休暇ニ當ル時ハ  
之ヲ算入セス

一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱  
スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ法律  
ヲ以テ定メタル曆ニ從フ

第二十七條 此規則ニ定メタル期限及ヒ裁判  
所ヨリ定ムヘキ期限ニハ陸路八里毎ニ一日  
ノ猶豫ヲ加フ八里未満ト雖モ三里以上十  
里ハ本同シ海上路程ノ猶豫ハ陸路四里ノ割  
合ヲ以テ一日ノ猶豫ヲ加フ



八月廿日午前會議 卯公 南部 中村 栗城 出席

第四編 始訴

第一章 始審裁判所

第一節 訴訟

第一條 訴訟ヲ起スモノハ訴狀正副二通ヲ裁判所  
管記局ニ差出ス可シ但訴狀ニハ左ノ條  
件ヲ記載ス可シ

一 原告被告ノ住所身分職業氏名代人アル  
時ハ其住所身分氏名

二 訴訟ノ標目

三 訴訟ノ事實及之理由

四 要求ノ主點

五 年月日及之管轄裁判所

第四編 始訴 司法省

六 訴訟物件金内ニ入ラサル時ハ其價額  
訴状ニハ酌解不調ノ証ヲ添フ可シ

第二條 義務ノ有無又ハ証層ノ真否ヲ證明セ  
シムルトヨ必要トスル場合ニ於テハ未ダ義  
務ヲ行フノ期至ラサル時ト雖モ之ヲ証明セ  
シムル為メ訴訟ヲ起ストヲ得

第三條 同一ノ被告ニ對シ數多ノ請求ヲ為ス  
場合ニ於テ其請求同一ノ裁判所管轄ニ屬シ  
且ツ同一ノ手續ヲ以テ審理ヲ受クハ其時ハ  
其各請求ノ原因ヲ異ニスルモ同一ノ訴状ヲ  
以テ訴訟ヲ起ストヲ得但訴状ニハ各請求ヲ  
區別シテ記載ス可シ

第四條 訴状ニ提供セル事實ハ確實ナリト認

ムルニ之ヲ以テ起訴ノ權利ヲ有スルノ理由  
ト為スヲ得サルト明白ナルニ於テハ裁判所  
ハ其理由ヲ明示シテ訴状ヲ却下スルトヲ得  
但此却下ニ對シテハ故障ノ申立ヲ為ストヲ  
得

訴訟送達  
送達ノ答  
書ノ出ス  
マシ

八月廿日午後會議 中村 宮城 出席

第五條 起訴ノ順序法律上ニ抵触スルトキ

時ハ昏記訴状ノ副本ヲ被告ニ送達シ且ツ十

四日以内ニ答弁昏ヲ出スヘキ旨ヲ達ス可シ

第六條 訴訟物件ハ訴状ノ副本ヲ送達シソル

時ヨリ拘束ヲ受ケルモノトス

拘束ハ左ノ効力ヲ有スルモノトス

一 物件拘束中原告被告ノ一方ヨリ其物件

全部又ハ裁部ニ分別ニ訴訟ヲ起シ又ハ

反訴ヲ為シ又ハ義務ノ相殺ヲ為サント

請求スルハ對キ人ハ其物件ノ訴訟中

ニ係ルトシテ理由トシテ之ヲ答弁ヲ拒ム

トヲ得

八月廿一日午前會議

中野部 栗塚 宮城

出席

二 訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ管轄ハ訴訟物件ノ増減住<sup>所</sup>降ノ変換等ニ依リ変更スルヲナシ

三 原告ハ被告ノ承諾ヲ受ケタルニアラスレハ訴訟ノ変更スルヲ得ス但変更シタル場合ニ於テ被告異議ヲ申立スレテ訴訟ニ取掛リタル時ハ之ヲ承諾シタルモノト看做スヘシ

左ノ場合ニ於テ起訴ノ原因ヲ変更セカ<sup>ル</sup>時ハ本条ニ定メタル訴訟ノ変更ト看做ス可カラズ

一 事實又ハ法律ニ関スル申立ヲ補足シ又

ハ正誤スル時

二 辯論、結局ニ至リ訟求ノ区域ヲ伸縮スル時

三 訴訟中物件ノ変更ニタルニ因リ其代トシテ他ノ物件又ハ償金ヲ要求スル時

第七條 原告被告ハ訴訟中ト虽モ其争フ所ノ物件ヲ他人ニ賣渡又ハ讓渡スルヲ得

此賣買讓與ハ訴訟ヲ変更スルノ効ナシ又買受人讓受人ハ訴訟對手人ノ承諾ナクシテ賣

渡人又ハ讓渡人ニ代リ訴訟ヲ繼續シ又ハ訴訟ニ参加スルヲ得又補助参加人ト為ル

時ト虽モ共同訴訟人ト看做スルヲ得ス  
本堂、裁判ハ買受人讓受人ニ對シテハ賣渡

トス  
人讓渡人ニ對スルト同一ノ効ヲ有スルモノ

第八條 訴訟ノ物件不動産ノ所有權其他ノ權

利ニ係ル場合ニ於テ其保有者不動産ヲ賣渡シ又ハ讓渡シタル時ハ其買受人讓受人ハ許

訟本人ト為リ訴訟ヲ繼續スルヲ得又對手人ヨリ本人ト為ルヘキヲ請求シタル時ハ

之ヲ拒ルヲ得ス

八月廿一日午後曾議 中村 出席

第九條 動産ノ得有不動産質入昏入ヨリ生ス  
ル權利ノ得有又ハ惡意ニアラサル得有ニ関  
スル民法ノ規則ニ抵觸スル時ハ第七條第三  
項及第八條ヲ適用スルヲ得ル此場合ニ於  
テハ被告ハ原告ニ對シ其賣渡讓渡ノ事實ヨ  
リ生シタル身分ナキヲ以テ抗論スルヲ得  
可シ

第十條 訴訟ハ願下ヲ為スルヲ得但被告ヨリ  
答辯昏ヲ差出シタル後ハ其承諾ヲ受リ可シ  
訴訟願下ヲ為スニハ昏面ニ副二通ヲ昏記句  
ニ差出シ昏記ハ速ニ其副本ヲ被告ニ送達ス  
可シ但對審ニ臨テ願下ヲ為ス時ハ昏面ヲ出

スヲ要セス

對審ニ臨テ被告即時ニ異議ヲ申立ルハ又ハ  
其他ノ場合ニ於テ願下各ノ副本ヲ送達シタ  
ル日ヨリ七日内ニ各面ヲ出サ、ル時ハ承諾  
シタルモノト者做ス可シ

原告訴訟ヲ願下ケタル時ハ其訴訟入費ヲ負  
擔スヘキモノトス

原告前ノ訴訟入費ヲ未タ弁償セスニテ再度  
同一ノ訴訟ヲ起シタル時被告ハ其弁償ヲ受  
ケサルヲ理由トシテ後ノ訴訟ニ取掛ルトヨ  
拒ムトヨ得

第十一條 被告訴訟ノ送達ヲ受ケタル後原告  
請求ノ全部ヲ承諾シ之ヲ各面ニ明記シテ各

記局ニ差出シタル時裁判所ハ別ニ對審ヲ為  
サスニテ承諾各ニ概リ裁判ノ名義ヲ以テ訴  
訟ノ終結シタル旨ヲ言渡ス可シ但此裁判ニ  
對シテハ控訴ヲ許サス

八月廿二日午前會議 中村部 宮城出席

第十二條 答旨：ハ左件ヲ記載ス可シ

一 原告被告ノ住所身分職業氏名代人アル時ハ其住所身分職業氏名

二 訴訟ノ標目

三 答辯ノ事實及ヒ理由

四 抗拒ノ主點

五 年月日及管轄裁判所

第十三條 被告ハ原告ノ請求ニ對シ左ニ記載

スル抗辯ノ一ヲ有シ且ツ証拠ヲ要スル場合

ニ限り其証拠ヲ確實ニスルヲ得ル時ハ答

旨ニ於テ其抗辯ニ甘先ツ對審ヲ請求スルノ

申立ヲ為スヲ得



一 訴訟事件裁判上受理ス可カラサルモノ  
ニ係ル時

二 裁判所管轄違ノ時

三 訴訟物件ノ拘束ヲ受ケタル時

四 起訴ノ能力又ハ代人ノ代理権ニ瑕疵アル時

五 訴訟入費ヲ辯償スヘキ資力ナキ時又ハ

前ノ訴訟入費ヲ辯償セヌシテ再度同一  
ノ訴訟ヲ起シタル時

本條ノ抗辯ハ訴訟ニ取リ掛ル以前ニ之ヲ為  
ス可シ若シ其抗辯要件アル時ハ之ヲ一時ニ  
申立ツ可シ

裁判所ニ於テ對審請求ノ申立ヲ不當ナリト

認ムル時ハ其決議書ヲ被告ニ送達シ十四日

内ニ本案ノ答弁ヲ為スヘキトテ申立可シ但

此決議ニ對シテハ故障ヲ許リス

裁判所ニ於テ對審請求ノ申立ヲ受理スルモ

其抗弁ヲ不當ナリト判定シタル時ハ其判定

ニ對シテ上訴スルヲ許ス可シ但原告ノ請求

アルニ於テハ直ニ本案ノ訴訟ニ取掛ル

ヲ余スルヲ得

第十四條 對訴ノ要求ト本訴ノ要求ト法律上

ノ關係ヲ有セサル時ハ其義務相殺ノモノニ

限リ答弁中ニ之ヲ申立ルヲ得

對訴ノ要求起訴裁判所ノ管轄ニ屬セサル時

ハ之ヲ受理セズ

第十五條 對訴ノ要求ト本訴ノ要求又ハ對訴  
ノ要求ニ及對セル弁論ト法律上ノ關係ヲ有  
スル時ハ前起訴裁判所ニ及訴スルヲ得  
又訴ハ答書又ハ再答書ト共ニ之ヲ中立ツ可  
シ其後ニ至リ申立ルヲ得ス  
第十六條 前二條ニ記載シタル要求ノ物件ハ  
答書ノ副本ヲ原告ニ送達シタル時ヨリ拘束  
ヲ受クルモノトス

八月廿二日午後會議 南部 宮城 出席

第十七條 昏記ハ答書ヲ受取リタル時ヨリ三  
日內ニ其副本ヲ原告ニ送達ス可シ  
原告ハ口頭對審ノ豫備ニ必要ナリト認ムル  
時又ハ第十四條第十五條ノ場合ニ於テハ答  
書ヲ受取リタルヨリ七日內ニ辯駁昏ヲ書記  
局ニ差出ス  
昏記ハ辯駁昏ヲ受取リタルヨリ三日內ニ其  
副本ヲ被告ニ送達シ被告ハ七日內ニ再答昏  
ヲ差出ス可シ

第十八條 裁判所ニ於テ必要ナリトスル時ハ  
原告又ハ被告ヲ呼出シ昏記ノ面前ニテ其訴  
上ヲ説明セシムルヲ得

第十九條 本章ニ定メタル期限ハ原告又ハ被告申立ニ因リ裁判所ニ於テ各昏類ニ付之ヲ二倍ニテ増加シ又ハ三日ヲテ減少スルヲ得

第二十條 原告又ハ被告ハ定期限内ニ昏類ヲ差出サストモ法律上之ニ付テ損害ヲ受クルト無シ但第十三條第十四條第十五條ノ場合ハ此限ニ非ス

原告又ハ被告口頭對審ニ於テ訴狀ノ事實ヲ弁知セサルヨリ對手人即時ニ之ト對審スル能ハサルカ為メ對審ヲ延期シタル時ハ裁判所ハ本訴ノ勝敗ニ関セス延期ヨリ生シタル費用ヲ其原告又ハ被告ニ負擔セシム可シ

第二節 口頭對審

第二十一條 裁判所ニ再答昏ヲ受取リタル時又ハ昏類差出ノ期限ヲ經過シタル時ハ口頭對審ノ為メ原告及ヒ被告ヲ呼出ス可シ

呼出狀ニハ原告被告及ヒ代人ノ住所身分職業氏名裁判所ノ名訴訟ノ標目番號出廷ノ日時ヲ記載ス可シ

再答書ノ副本ハ呼出狀ト共ニ對手人ニ送達ス可シ  
呼出狀送達ノ日ト出廷ノ期日トハ滿三日ヲ隔ツ可シ但至急ヲ要スル訴訟ニ付テハ二十四時間ニ減スルヲ得

第二十二條 裁判長ハ口頭對審ヲ開キ及ヒ其

指揮ヲ為ス可シ

裁判長ハ原告被告ヲシテ陳述ヲ為サシム若  
シ余令ニ從ハサル者アル時ハ陳述ヲ整スル  
ト得

裁判長ハ裁判所ノ意見ニ於テ事實ヲ悉シク  
ルト認ムル時ハ對審ヲ閉テ裁判言渡ヲ為ス  
可シ

裁判所ハ對審ヲ閉ルモ再夕ヒ之ヲ開クトヲ  
余スルヲ得

八月廿三日午前會議 卿公南部 栗塚 出席

第二十三條 原告被告ハ事實ノ點ト法律ノ點

トヲ問ハス訴訟ニ関スル事項ヲ陳述ス可シ

若シ書類ノ又面ヲ知ルノ必要アル時ハ其部

分ニ限リ朗讀ス可シ

裁判所ハ此法律ニ別段ノ定ノナキモノニ限

リ原告被告ノ陳述ノミヲ以テ裁判ス可シ原被

告ノ陳述セサルモノハ其差出シタル書類ニ

記載スト雖モ之ヲ裁判ノ資料ト為ス可カラ

ス

第二十四條 原被告ハ其對手人ノ假定スル事

實ニ付之ヲ明辨ス可シ

原被告其對手人ノ假定スル事實ヲ明白ニ駁

撃セサル時ハ之ヲ承認シタルモ、ト看做ス  
可シ但他ノ部分、論辯ニ因テ其攻撃ノ目的  
アリシト明白ナル時ハ此限ニアラス  
原被告ハ自己ノ関セサル事實又ハ其見聞セ  
サル事實ニ付テハ知ラサル旨ヲ以テ抗辯ス  
ルヲ得此抗辯ハ事實攻撃ト同一ノ効力ヲ  
有スルモノトス

第二十五條 原被告ハ口頭對審ノ終結マテ本  
章第一節ノ規則ニ準シ攻撃又ハ辯護ノ方法  
(抗辯及訴辯駁ノ類)ヲ用フルヲ得  
原被告對審ノ終ラントスルニ臨ミ新クニ攻  
撃辯護ノ方法ヲ提出シ為メニ訴訟ノ落着ヲ  
遅延セシメタル時ハ裁判所其遅延ノ責アリ

ト認メタル勝訴者ニ訴訟入費、全部又ハ幾  
部ヲ負擔セシム  
被告又ハ反訴ノ對手人辯護ヲ申立ツルモ之  
カ為メ訴訟ノ落着ヲ遅延セシムヘキノ恐ア  
リ且フ被告審理ヲ澁滞セシムルノ故意又ハ  
大ナル不注意ニテ辯護ヲ提出ヲ遅延シタル  
トハ他一方ヨリ申立裁判所ニ於テ其申立ヲ  
相當ナリト認ムル時ハ其辯護ヲ許サ、ルヲ  
得

第二十六條 原被告其主張スル所ノ事實ヲ證  
明シ豫シメ證據ヲ提出シ之ヲ使用スルノ目  
的ヲ指示ス可シ又對手人ヨリ提出シタル證  
據ニ付キ辨明ス可シ但証據ノ提出及之ニ

関スル陳述ハ本章第三節ヨリ第  
節マテ  
規則ニ從フ

八月廿五日午前會議 郷公 南部 宮城 出席

第二十七條 証拠ノ提出及ヒ辯明ハ口頭對審

ノ終結マテ之ヲ為スルヲ得

對審ノ終ラントスルニ臨ミ新ニ証拠ノ提出

及ヒ弁明ヲ為サントスルニハ第二十五條第

二項第三項ノ規則ヲ適用スルヲ得

第二十八條 裁判長ハ職権ヲ以テ審問マキ

事項ニ付原被告ノ注意ヲ惹起スルヲ得又

不明瞭ナル陳述ヲ明瞭ナラシメ又ハ提出シ

タル事項ヨリ正確ナラシメ又ハ証拠使用ノ目

的ヲ指示セシメ其他一般ノ情状ヲ説明セシ

ムル等ノ問ヲ答スルヲ得

前項ノ場合ニ於テ列席裁判官又ハ檢事問ヲ

登セント欲スル時ハ裁判長之  
辯論関係人ニ於テ裁判長之  
職權ヲ以テ原告本人ヲ呼出シ又ハ其所持  
スル訴訟関係ノ書類ヲ差出サシムルヲ得  
原告前項ノ命令ニ従ハサル者アル時ハ其  
審明スヘキ事情ニ付テハ其曲者タルヲ認  
定シ又ハ其事情ノ及訴ヲ認定シ其証明ヲ申  
立ルヲアルモ之ヲ取上ケサルモノトス  
第三十條 裁判所ハ左ノ命令ヲ為スノ權アル  
モノトス

第二十九條 裁判所ハ事情ヲ審明スル為メ其  
職權ヲ以テ原告本人ヲ呼出シ又ハ其所持  
スル訴訟関係ノ書類ヲ差出サシムルヲ得  
原告前項ノ命令ニ従ハサル者アル時ハ其  
審明スヘキ事情ニ付テハ其曲者タルヲ認  
定シ又ハ其事情ノ及訴ヲ認定シ其証明ヲ申  
立ルヲアルモ之ヲ取上ケサルモノトス  
第三十條 裁判所ハ左ノ命令ヲ為スノ權アル  
モノトス

一 訴訟中數箇ノ要求アル時之ヲ數箇ノ  
訴訟ニ分離セシムル事

二 義務相殺又ハ及訴ノ要求ト原告ノ要求  
ト法律上ノ関係ヲ有セサル時ハ別ニ訴  
訟ヲ為サシムル事

三 原告ノ同一ナルト否トヲ問ハス數箇  
ノ訴訟互ニ相聯結シ又ハ一訴訟ヲ以テ  
其要求ヲ為スヲ得ル時ニ限り數箇ノ訴  
訟ヲ合併スル事

四 同一ノ要求ニ係ル攻撃又ハ辯護ノ方法  
數箇アリテ互ニ相関係セサル時ハ先ツ  
其一方方法ニ付對審セシムル事

五 訴訟判決ノ全部又ハ幾部若シ他ノ訴訟

同法省

目的タル權利義務又ハ行政官ノ定ム  
ハキ權利義務ノ有無ニ關係スル時ハ他  
ノ訴訟ノ給結スルマテ又ハ行政官ノ處  
分アルマテ本案ノ對審ヲ中止スル事  
六 訴訟中本案ノ判決ニ影響ヲ及ホスヘキ  
犯罪ノ微憑発露シタル時ハ刑事ノ終結  
ニ至ルマテ對審ヲ中止スル事

裁判所ハ訴訟中何時ニモ訴訟ノ分離合併  
及ヒ中止ニ關スル命令ヲ取消スルヲ得  
本條第五第六ノ場合ニ於テハ故障ノ申立ヲ  
為スルヲ得第一乃至第四ノ命令ニ對シテハ  
故障ノ申立ヲ為スルヲ得ス

八月廿五日午後會議 中村出席

第三十一條 裁判所ハ分明ニ陳述ヲ為スル能

ハナル原被告ニ對シ其陳述ヲ差止メ更ニ期  
日ヲ定メ代言人ヲシテ代辯セシメ又ハ附添  
人トシテ出廷セシムルヲ命スルヲ得若シ  
其期日ニ至リ代言人又ハ附添人ナクシテ出  
廷シ其陳述不分明瞭ルカ為メニ再度陳述ヲ  
差止ルルアル時ハ對手人ノ請求ニ因リ自カ  
ニ退廷シタルト看做スルヲ得  
訴訟代人及ヒ附添人其任ニ堪一ナル時又ハ  
訴訟代人附添人ヲ職業ノ如ク為ス者アル時  
ハ之ヲ退廷セシメ其訴訟ニ從事スルヲ止  
ムルヲ得此場合ニ於テ原被告本人在廷セザ



ル時ハ更ニ期日ヲ定テ呼出状ヲ發ス可シ其  
呼出状ニハ代人ヲ退廷セシメタル決議等ヲ  
添テ送達ス可シ又本人ヲ呼出シタル場合ニ  
於テハ再度代言人ニアラルサル訴訟代人及附  
添人ヲ用フルトヲ禁スルヲ得  
本條ノ規則ニ從ヒ發シタル命令ニ對シテハ  
故障ヲ許サス

第三十二條 裁判所書記ハ口頭對審ノ調停ヲ

作ル可シ

其調停ニハ左ノ事項ヲ記載ス可シ

一 對審ノ場所及ヒ年月日時

二 裁判官及ヒ書記ノ氏名振事及ヒ通事ノ

ル時ハ其氏名

三 訴訟ノ標目及ヒ原被告ノ住所身分職業

氏名代人又ハ附添人アル時ハ其住所身

分職業氏名

四 原被告本人及ヒ代人附添人ノ出廷シ

ル事又ハ原被告本人及ヒ成規ノ委任状

ヲ攜帶シタル代人ノ出廷セサル事

五 傍聴ヲ許ルシ又ハ之ヲ禁シタル事

六 審理中判定シタル各事項

第三十三條 調停ニハ對審ノ始末ヲ畧記ス可

シ但各類中ニ記載スルモノハ筆記スルヲ要

セス

新タナル申立及ヒ書類中ニ記載シタル事ヲ

變更シタルモノハ訴訟ニ關係アルモノニ限

リ記載ス可シ又對審中立証シタル時ハ其事  
項ヲ記載ス可シ但別紙ニ記載シタルモノト  
雖モ調卷ニ添ハタル時ハ調書ト同一ニ看做  
スモノトス

調卷ハ辯論干典人ノ面前ニ於テ朗讀シ又ハ  
干典人ニ通讀セシメ其承諾ノ証トシテ署名  
捺印セシム可シ若シ之ヲ拒ム者アル時ハ其  
理由ヲ調書中ニ記入ス可シ  
裁判長及ヒ各記ハ調卷ニ署名捺印ス可シ

八月廿六日午前會議

南部中村 宮城 出席

第三十五條 原告又ハ被告訴訟手續中特ニ方

式ニ關スル條規ニ因ラサリシトテ黙過シ又

ハ次回ノ對審若クハ各類ニ於テ條規ニ因ラ

サリシトテ申立サル時ハ後ニ至リ申立ツル

ヲ得ス又之ヲ上訴スルトテ得ス

前項ノ規則ハ原告被告ヲ分タス然テ遵守セザ

ル可カラザル條規ニ背キタル場合ニ之ヲ適

用スルトテ得ス

第三十五條 辯論干典人ハ裁判所ノ訴訟各類

ヲ展覧スルトテ得又ハ自己ノ費用ヲ以テ各

記ニ其抜卷又ハ謄本ヲ求ムルトテ得

原告被告ニ非サル者訴訟各類ヲ展覧スルニハ

原被告ノ兼諾ヲ經ルニアラサレハ裁判所長ノ許可ヲ受ル可シ所長ハ其昏類ノ展閱請求者ノ權利義務ニ關係アリト認ムル時ニ限リ之ヲ許ス可シ  
本條ノ規則ハ檢事ニ適用スルトヲ得ス  
裁判決議命令等ノ草紙及ヒ其資料トナルハ  
昏類ハ展閱又ハ謄写ヲ請求スルトヲ得ス

第三節 立証通則及ヒ立證後ノ對審

第三十六條 原告又ハ被告一事實ニ付攻撃又ハ辯護ノ申立ヲ為ス時ハ其立証ヲ為ス可シ  
原告ハ其訴權ノ成立ニ必要ナル事實ヲ証明ス可シ被告ハ訴權ノ成立ヲ妨ケ又其訴權ノ

成立タル時ハ之ヲ制限シ又ハ之ヲ撲滅シ又ハ消尽シタル事實ヲ証明ス可シ又ハ原被告ハ攻撃又ハ辯護ヲ為スノ原因ト為ル事實ヲ証明ス可シ

原告又ハ被告其訴權ノ原因タル事實ヲ認メ又ハ認メサルモ之カ為メ立証義務者ヲ變更スルトナキモノトス  
原告又ハ被告對手人ノ提出シタル事實ニ付及証ノ用意ヲ為シタリト雖モ立証義務者ヲ變更スルトナキモノトス

原告又ハ被告

第三十七條 左ノ事實ニ付テ原被告ニ於テ証明スルトヲ要セス

- 一 公衆ニ知レルモノ
- 二 法律ニ於テ一ノ事實ノ確定ニ因リ他ノ事實ヲ推測ス可シト定メタルモノ
- 三 對手人訴訟中裁判所ニ差出シタル書類又ハ對審中書記ノ記載セル調停又ハ一裁判官ノ取扱ヒタル對審ニ於テ兼語シタル事實

八月廿六日午後會議

中村 宮城出席

第一ノ場合ニ於ケル推測ニ對シ反証ヲ許ス  
 第二ノ場合ニ於ケル推測ニ對シ反証ヲ許ス  
 第三ノ場合ニ於ケル裁判上ノ自認ハ之レニ  
 攻撃又ハ辯護ヲ加フルモ其効ニ影響ヲ受ク  
 ルトナキモノトス但攻撃辯護ノ種類ニ因リ  
 自認ノ區域ヲ立ツルハ各事件ノ情狀ニ從  
 フモノトス

裁判上自認ノ取消ハ之ヲ取消サントスル者  
 ニ於テ事實ニ反シ且ツ錯誤ニ出テタルトヨ  
 証明スルニアテサレハ之ヲ為ストヲ得ス  
 法律ノ誤辯ヲ以テ裁判上自認取消ノ原因ト  
 為ストヲ得ス

第三十八條 裁判所ハ原告ノ攻撃辯護及ヒ  
 各証拠ニ依テ裁判ス可キ其職權ヲ以テ原告  
 告論外ノ點ニ審究ス可カラズ但訴訟事件ノ  
 外國ノ法律内國ノ慣習商業ノ慣例郡邑西村  
 ノ規則又ハ一部人民ノ申合規則等ニ關係ヲ  
 有シ裁判所之ヲ知ルヲ必要トスル時ハ此限  
 ニテラス

第三十九條 原告ノ陳述ニ因リ充分ノ明瞭  
 ヲ得ル能ハス又ハ技術ニ關スル事件ニ係ル  
 時ハ裁判所ハ其職權ヲ以テ檢証ヲ為シ又ハ  
 鑑定人ヲ之ヲ鑑定ヲ為サシメ之ヲ原告又ハ  
 被告ノ申立タルモノト見做スルヲ得

八月廿七日午前會議 南部宮城出席

第四十條 裁判所ハ對審ノ始末及ヒ立証ノ成  
 績ヲ斟酌シ其信認スル所ヲ以テ事實ノ真否  
 ヲ判決ス可シ

判決狀ニハ信認ノ理由ヲ記載ス可シ

尤ノ場合ニ於テハ本條第一項ノ規則ヲ適用  
 スルヲ得ス

一 此法律ニ於テ一定ノ立證條規ヲ明記シ  
 タル時

二 確定シタル刑事裁判ノ事實民事裁判ヲ  
 拘束スル時

第四十一條 損害ノ有無及ヒ損害ノ多少又ハ  
 失フタル利益ノ有無及ヒ其利益ノ多少ニ付

原被告ノ間ニ争ヲ生シタル時ハ裁判所事件ノ情状ヲ斟酌シ其信認スル所ヲ以テ之ヲ判決ス可シ此場合ニ於テ原被告ノ立証ヲ許シ又ハ職権ヲ以テ檢証シ又ハ鑑定人ヲ以テ鑑定セシムルト否トハ裁判所ノ考定ニ任ス

第四十二條 此法律又ハ民法ノ規則ニ於テ原被告ノ主張スル事實ノ陳述ヲ採用スルニ他ノ輔翼証據ノ必要ナリトスル場合ニ於テハ公正証人又ハ証人ノ宣誓シテ為シタル説明書ヲ差出ス可キモノトス若シ此等類不完全ナル時ハ裁判官ハ直ニ証人ヲ呼出シ審問スルヲ得

第四十三條 証據ノ取調ハ起訴裁判所ニ於テ

之ヲ為ス可シ但緊要ナル理由アル時ハ限り起訴裁判所ノ一裁判官ヲシテ代審セシメ又ハ他ノ裁判所ニ囑託スルヲ得

原被告ハ証據取調ニ立會フヲ得

第四十四條 証據取調ヲ對審ト繼續セス更ニ期日ヲ定テ起訴裁判所又ハ代審裁判官ノ面前又ハ受託裁判所ニ於テ為ス時ハ其決議ノ言渡ヲ為ス可シ

決議層ニハ左ノ件ヲ記載ス可シ

- 一 証明スヘキ事實
- 二 立証ノ方法審判スヘキ証人及ヒ鑑定人ノ氏名
- 三 提出シタル事實ヲ証明シ又ハ攻歿キタル

第四條起算者自  
前...

為立証ノ方法ヲ申立タル原被告ノ氏  
名

四

此決議ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ執行ス可  
シ

八月廿七日午後會議 宮中 出席

第四十五條 證據取調ノ命令ヲ受ケタル起訴

裁判所ノ裁判官又ハ受託裁判所ニ於テ証拠

取調ヲ為ス時亦原被告ヲ呼出ス可シ原被告

ノ一方又ハ双方出庭セザル時ハ原告取調ヲ

為スルヲ得ル限ハ之ヲ為ス可シ

証拠取調ニ関スル調書ハ原告ノマ、起訴裁

判所ノ書記ニ交付ス可シ

第四十六條 外國ニ於テ為スル一キ証拠取調ハ

司法卿ヲ經由シテ其國相當ノ官衙若クハ其

國駐劄ノ本邦公使ニ囑託スヘキモノトス

外國ノ法律ニ於テ証拠取調ハ立証ヲ為ス者

ヨリ直ニ其國ノ官衙ニ請願スヘキヲ定

同條

マタル時ハ本人ニ囑託昏ヲ渡ス可シ  
裁判所ハ本人ニ命ジ立証上外國ノ法律ニ相  
当スル公証昏類ヲ差出サシムルヲ得  
第四十七條 前条第二項第三項及ニ其他ノ場  
合ニ於テ立証ニ差支アルヲ申立其時間不  
定ナル時ハ對手人ノ申立ニ依リ期限ヲ定テ  
猶豫スルヲ得若シ其期限ヲ經過スルニ之  
ヲ為メニ許証ヲ延滞セシムルヲナキ場合ニ  
於テハ更ニ猶豫ノ期限ヲ悞フルヲ得  
第四十八條 特別ノ手續ヲ要スル証取調ヲ  
起訴裁判所ニ於テ為スニ付其決議ヲ言渡ス  
場合ニ於テ其期日ヲ定ム可シ此期日ニハ別  
續ニ口頭對審ヲ為スヲ得

証取調ヲ一裁判官ニ命ジ又ニ他ノ裁判所  
ニ囑託シタル時ハ立証對審ノ終リタル後更  
ニ對審ノ期日ヲ定ム可シ  
第四十九條 裁判長ハ前条ノ場合ニ於テ列席  
裁判官ニ交送ナキ時ハ其意見ヲ以テ更ニ定  
メタル期日ニ於テ原被告ヲシテ許証ノ細目  
ヲ措キ大体ノ陳述ヲ為サシムルヲ得裁判  
長ハ代審裁判官又ハ受託裁判所ノ証取調  
昏ヲ各記ニ朗讀セシメ又ハ裁判長自カラ大  
要ヲ演說シ又ハ列席裁判官ヨシテ演說セシ  
ムルヲ得  
裁判所ニ於テ其事實ヲ尽サスト認メタル時  
ハ代審裁判官又ハ受託裁判所ニ於テ為シタ



ル証取調、全部又ハ裁部ニ付テ原告又ハ被告ノ欠席シタル時ハ其申立ニ依リ之ヲ再行シ又ハ補足スルヲ得但之カ為メニ訴訟ノ延滞スルヲナク又ハ立証者ノ期日ニ出場セザリシハ自己ノ過失ニテラザリシヲ証明シタル時ニ限ルモ、トス

八月廿八日午前會議 御公中御宮城 出席

第四節 証取昏類

第五十條 官吏其職權ヲ以テ作リタル昏類又ハ公証者其職務ヲ以テ作リタル昏類ハ成規ノ方式ニ適シタル時完全ナル証取ノ効力ヲ有スルモ、トス昏類ニ官吏又ハ公証者、面前提ニ於テ為シタル説明ヲ記載シタル時ハ其記載シタル事實ノ真ナルヲ証スルモノトス

第五十一條 昏類中ニ成規ノ方式ニ依テ昏シタルヲ記載スルモ其実之ニ依ラザルヲ又ハ官吏若シハ公証ヲ為ス者、故意誤解其他誤謬ヨリ事實ニ相違スル昏類ヲ作リタルヲ

殊ニ書類中ニ説明ヲ為シタリト記載シタル人ノ実ハ其人ニ非ルト又ハ書類中ニ記載シタル事項其實ニ違ヒ若クハ其實ナキト申立ル者アル時ハ其中立ニ付立証ヲ為サシムルコトヲ得

第五十二條 書類ハ官吏又ハ公証ヲ為ス者ノ管轄違若クハ方式ニ背キタルニ因リ公正ノ証看タル効力ヲ失ヒタル時ト雖比私看ノ証効力ヲ有スルモノトス但第 條ノ規則ニ適合スルコトヲ要ス

第五十三條 私看ハ第 條ニ掲ケタル規則ニ適スル時其記載シタル説明ノ本人ヨリ出テタルコトヲ証スルモノトス

私書中ニ記載シタル事項ハ其私書ノ証スル年月日ニ於テ為シタルモノニ非ズニテ他ノ時日ナルコトヲ申立ル者アル時其中立ニ付立証セシムルコトヲ得

第五十四條 如何ナル場合ニ於テ權利義務ヲ生スル所為ヲ効力アルモノトシ又ハ之ヲ証明スル為メ公私ノ看類ヲ要スルト又如何ナル資料ニ依リ後日ノ承認看其他ノ看類ヲ以テ所為ノ瑕疵ヲ補綴シ又後日ニ至リ為シタル他ノ所為殊ニ其事ノ履行ニ因リ看類ノ瑕疵ヲ補綴ス可キヤ否ハ民法ノ規則ニ從フ第五十五條 原告又ハ被告其主張スル事實ヲ証スヘキ看類アルコトヲ申立ルハ裁判所ノ

余ニ從セ之ヲ提供スルモノトス

第五十六條 立証者立証ニ必要ナル旨類ノ對  
手人ノ手ニアルヲ申立ル時ハ裁判所其對  
手人ヲシテ是ヲ提供セシム可シ但對手人法  
律上ニ於テ其義務ヲ有セザル充分ノ理由ヲ  
申立ル時ハ此限ニ在ラス

第五十七條 對手人旨類ヲ所持セラル旨ヲ申  
立ル時ハ其真否ヲ確實ニスル為メ又ハ立証  
者ヲシテ旨類ヲ使用セシメザルノ目的ヲ以  
テ之ヲ毀棄藏匿シ若クハ其用ヲ失ハシメタ  
ルト否トヲ審明スル為メ對手人ヲ証人ト為  
レ<sup>レ</sup><sub>レ</sub>問スルヲ得但此場合ニ於テハ第  
五<sup>レ</sup><sub>レ</sub>條ノ規則ヲ適用ス可シ

對手人若シ官廳ニシテ旨類ノ現存セズ又ハ  
其所在ヲ審ニセザル時ハ其長官ノ証旨ヲ以  
テ訊問ニ換ヤルヲ得

第五十八條 對手人旨類ノ所持スルヲ承認  
スルモノ之ヲ提供スルノ余令ニ從ハズ又ハ  
旨類所持ノ事ニ付証人トシテ陳述スルヲ  
拒ミ又ハ其陳述若クハ其他ノ方法ニ依リ故  
意ヲ以テ旨類ヲ毀棄藏匿シ若クハ其用ヲ失  
ハシメタルト確實トシ場合ニ於テ立証者旨  
類ノ謄本ヲ提供シタル時ハ裁判所ハ之ヲ以  
テ正当ノモノト認ム可シ若シ其謄本ヲ以  
テ旨類ノ性質及ヒ事實ニ付立証者ノ申立ル  
所ヲ以テ正当ノモノト認ム可シ

官廳若シ前條第三項ニ記載シタル長官ノ証書ヲ裁判所ノ指定シタル期限内ニ提供セシル時ハ前項ノ規則ヲ適用スルコトヲ得

八月廿八日午後會議

中村 宮城

出席

第五十九条

立証者立証ニ必要ナル旨類ノ弟

三者ノ手ニアルコトヲ申立テ且ツ其申立ヲ確

実ニシ若クハ其事實相違ナシト思料スヘキ時ハ立証者ノ請求ニ因リ弟三者ヲシテ旨類

ヲ提供セシメ又ハ其所持スルコトニ付証人ト

シテ呼出スルコトヲ得

呼出状ニハ左ノ件ヲ記載ス可シ

一 原被告及ヒ呼出ヲ受クル者ノ住所身分

職業氏名

二 証明スヘキ事實及ヒ旨類ノ明細旨

三 旨類提供スルノ出頭スヘキ日時場所及

ヒ呼出ニ應セサル時ハ法律ニ照シ罰ス

第六十条 以下数条ヲ除リノ外本章第五節証

人ニ関スル規則ハ本節ニモ亦之ヲ適用ス

第六十一条 第三者昏類ヲ提供シタル場合ニ

於テ立証人自己ノ申立ヲ証明スル昏類ナル

丁ヲ認メタル時ハ第三者ヲ証人トシテ訊問

スルヲ要セス

第三者昏類ヲ所持セサル旨ヲ申立ル時ハ第

五十七条ノ規則ニ從ヒ証人トシテ之ヲ訊問

ス可シ

第三者昏類ヲ所持スル丁ヲ承認スルモ法律

上ニ於テ立証者ノ為メニ昏類ヲ提供スルノ

義務ヲ有セサル旨ヲ申立ル時ハ裁判所ハ其

申立ノ当否ヲ議決ス可シ若シ第三者此議決

ニ拘ハラズ昏類ヲ提供スル丁ヲ拒ム時ハ立

証者ノ申立ニ因リ第 三条陳述ヲ拒ム証人

ニ對スル處分ヲ適用ス可シ此処分ニ對シテ

ハ故障ノ申立ヲ為ス丁ヲ得

第三者昏類所持ノ丁ニ付証人トシテ訊問ヲ

受ケル丁ヲ拒ムヲ得ルノ理由ハ証人ノ証據

ヲ陳述スル丁ヲ拒ムヲ得ルノ理由ニ同シ

第六十二条 官廳ニ對シテハ前三条ノ規則ヲ

適用ス可カラズ

原被告ニ非カル官廳ニ於テ裁判所ノ囑託ニ

応ジ其保存スル所ノ昏類ヲ証據トシテ提供

又ハ証據ニ供スル為メ昏類ノ性質及ヒ事實

ニ付報知ヲ為スヘキ權利義務ヲ有スルト否  
ト又ハ如何ナル条件ニ於テ之ヲ有スルト否  
トハ官廳ノ職制章程ニ依ル可キモノトス  
第二十三條 裁判所ハ原告又ハ被告ヨリ提供  
シタル書類ヲ對手人ニ示シ其条明ヲ為シ  
可シ

公正証書ハ其本旨又ハ式ニ從テ確認シタル  
謄本ヲ提供スルト得但裁判所ハ其職權又  
ハ對手人ノ申立ニ因リ立証者ヲシテ本旨ヲ  
提供セシムルト得

私旨ハ其本旨ヲ提供ス可シ原告其本旨ノ  
真正ナルヲ認メタリト虽モ其旨中ニ記載シ  
タル説明ノ効力又ハ解釋ヲ爭フ時ハ字旨ヲ

以テ之ヲ代フルト得但此場合ニ於テニ裁  
判所ハ其職權ヲ以テ本旨ヲ提供セシムル  
ヲ得

本旨ヲ提供セシムルノ余令ニ從ハサル時ハ  
裁判所ハ其意見ヲ以テ本条第二項ノ場合ニ  
於テ確認シタル謄本ノ如何ナル効力ヲ有ス  
ルヤ又第三項ノ場合ニ於テ本旨ノ文意ノ不  
備ナルハ裁判上如何ナル關係ヲ有スルヤヲ  
判決ス可シ

八月廿九日午前會議

南 部 東 塚  
中 村 宮 城

出席

第六十四條

起訴裁判所ハ書類ヲ

口頭對審ノ

期日又ハ代審裁判官又ハ受託裁判所ニ提供

セシムヘキト否トヲ定ム可シ

口頭對審ニ於テ書類ヲ提供セシムルハ不便

ニシテ且ツ費用ヲ要スル時又ハ緊要ノ書類

ヲ表失シ又ハ破損スルノ憂アル時又ハ官廳

ニ保存スル書類ノ展閱ヲ必要トスルモ官廳

ノ之ヲ起訴裁判所ニ送致スルコト好マサル

時ハ前項代審裁判官又ハ受託裁判所ニ於テ

為サレハルノ手續ニ依ル可シ

代審裁判官又ハ受託裁判所ハ書類ノ明細目

及ヒ必要ナル部分ニ限リ其寫ヲ調音ニ記入

ス

レ又ハ添付ス可シ

第六十五條 昏類ノ体裁及ヒ記載シタル事實

ニ依リ官更又ハ公証ヲ為ス者ノ作りタル

ヲ確認ス可キモノハ其書類ノ正當ナルヲ

推測ス一キモノトス

前項ノ推測ニ對シテ及對ノ立証ヲ為スルヲ

得

公正証昏ノ正否ニ付疑アル時ハ裁判所ハ職

權ヲ以テ官廳又ハ公証ヲ為ス者ニ契會ニ其

説明ヲ為サシムルヲ得

外國ニ於テ作りタル昏類ノ公正証昏ト称ス

ルモノハ正當ナルト認ト否トニ付他ニ証據

ナキ時ハ裁判所其事情ヲ斟酌シテ適當ノ判

決ヲ為ス可シ但公正証書ヲ作りタル者ノ管

轄及ヒ其証昏ノ真否ニ付在外本邦公使又ハ

領事ノ保証アル時ハ之ヲ確實ト看做ス可キ

モノトス

第六十六條 私昏ノ正當ナルヲ對千人ニ於

テ承諾セラル時ハ証明ス可シ

私昏ヲ作りタル者ノ署名及ヒ捺印アル時ハ

其署名捺印影ノ真正ナルヲ又ハ第三編第十

四條ニ準テ立會人ノ署名アル時ハ其署名及

ヒ本人ノ捺印ノ真正ナルヲ又立會人ノ捺印

アル時ハ本人及ヒ立會人ノ印影ノ真正ナル

ヲノ確定スルニ於テハ署名及ヒ捺印ノ前ニ

記載シタル文字ハ真正ナルヲ推測スルキ



毛ノトス

第二十七條 書類ノ真否ヲ証明スルニハ法律

ニ於テ許シタル立証方法ヲ用ヒ又ハ筆跡ヲ

比照スルヲ得

唇類ノ真否ヲ証明スルニハ原告被告ハ比照ノ為

ニ適當ノ筆跡ヲ提供ス可シ

真正ナルヲ承認シ又ハ証明ニタル筆跡ヲ

キ時ハ裁判所本人ヲシテ指定ニタル文字ヲ

書セシムルヲ得此文字ハ調書ニ添附ス可

シ

裁判所ハ其意見ヲ以テ筆跡比照ノ成績ニ付

書類ノ真否ヲ判決ス可シ但必要ハ認めル場

合ニ於テハ鑑定人ヲシテ鑑定セシメタル後

判決ス可シ

原告被告相当ノ理由ナクシテ裁判所ノ命令ヲ

如ク文字ヲ書セス又ハ故意ヲ以テ筆跡ヲ変

シタルヲ明瞭ナル時ハ其書類ノ真否ニ付對

争人ノ申立ニ所ヲ以テ直ニ確定ナリト認め

其他ノ立証ヲ用ヰルヲ要セス

第二十八條 提供ニタル書類若シ偽造變造ノ

疑アル時ハ換事ノ許可アルニテラガレハ之

ヲ還付ス可カラズ

第五節 証人

第六十九條 証人ノ呼出状ニハ左ノ件ヲ記載

ス可シ

一 原告被告及ヒ証人ノ住居職業身分氏名

二 訊問ス一キ事實

三 出頭ス一キ日時場所及ニ呼出ニ応セリ  
ル時ハ法律ニ照シ罰ス可キト

呼出状送達ト出頭トノ間二十四時以上ヲ隔  
ツ可シ

事實ヲ登見スル為メ証人ヲ其場知ニ於テ訊  
問スルトシテ必要ナリトスル時ハ之ヲ其場所  
ニ呼出ストシテ得又証人ノ裁判所ニ在廷シタ  
ル時ハ裁判官ヲ其場知ニ案内セシムルトシテ  
得

陸海軍隊附在役ノ下士官及ヒ兵卒ハ其直接  
ノ長官ヲ經由シテ呼出ス可シ其長官ハ之ヲ  
其期日ニ出廷セシムルノ手續ヲ為ス可シ但シ

当日職務上已ムヲ得サレ差支アル所ハ延期  
ヲ裁判所ニ照會ス可シ

八月廿九日午後會議 中村宮城 出席

第七十條 成規、手續ヲ以テ呼出シタル證人

其期日ニ出頭セサル時ハ裁判所ハ之カ為メ

ニ生レタル訴訟入費ヲ負擔セシメ且五拾錢

以上拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ若シ之ヲ

納完セサル時ハ財産ヲ差押ヘテ之ヲ追徴シ

又ハ刑法第二十七條ニ照シテ處分ス可シ

證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金

ヲ言渡シ又ハ直チニ拘引狀ヲ發スルヲ得

但此言渡ニ對シテハ故障ノ申立ヲ許サス

陸海軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及執行ハ

其官等ニ拘ハラス陸海軍々法會議ニ委託ス

可シ又軍人軍屬ノ拘引スル時ハ其直接官廳

ニ照會シテ之ヲ為ス可シ

證人ノ欠席相當ノ理由アル時ハ訴訟費用ノ負擔及罰金ヲ言渡スルヲ得ス若シ之ヲ言渡シタル後相當ノ理由アルトテ認ムル時ハ其言渡ヲ取消スルヲ得

第七十一條 証人ト為ルニキ者原被一方ノ為

ノニ刑法第百十四條及第百十五條ニ掲ケタル親族ナル時ハ証人ト為ルトテ許サズ但事

實參考ノ為ニ其陳述ヲ聽クトテ得

左ノ場合ニ於テ原被一方ノ親族ハ其親族ト

ル一方ノ為トニ証人ト為ルトテ得

一 家族ノ誕生婚姻及死亡ノ證明ニ係ル時

二 親族ノ續合ヨリ生シタル財産處分ノ事

件ニ係ル時

三 証書ヲ作ル時証人ト為リタル者其証書

ノ成立及ヒ事實ノ証明ヲ要スル時

四 原被告一方ノ賣渡人讓渡人又ハ其代理

人トテリシ事ニ關係アル時

八月三十日午前會議

南部 宮城  
中村

出席

第七十二條 尤ニ記載スル者ハ證人ト為ル  
ヲ許サズ但事實參考ノ為ノ其陳述ヲ聽リ  
ラ得

- 一 訊問ノ時十六年未滿ノ者
- 二 訊問ニ必要ナル知覺精神ノ不充分ナル者
- 三 公權ヲ剝奪セラレ又ハ停止セラレタル者
- 四 原被告一方ノ後見ヲ受ケル者
- 五 訴訟ノ結果ニ直接ノ關係ヲ有スル者
- 六 原被告一方ノ雇人

第七十三條 左ニ記載スル場合ニ於テハ證人

ト為ルヲ拒ムト得

一 官吏タル者ハ退職後ト虽モ官ノ機密ナル事項ニ付證人ト為ルニ於テハ之ヲ漏スノ恐アル時

二 醫師藥師<sup>高</sup>穂<sup>高</sup>代<sup>高</sup>言人辨<sup>高</sup>獲人公證人及ヒ神官僧侶其身分職業ニ於テ依託ヲ受ケタル事項ニ付秘密ヲ漏スノ恐アル時  
三 證人ト為リテ陳述ヲ為ス時ハ自己又ハ親屬ノ名譽ヲ毀損モ又ハ其刑事ノ關係ヲ露スルノ恐アル時

四 一ノ訊問ニ對シ陳述ヲ為ス時ハ自己又ハ家族ノ財産ニ直接ノ損害ヲ生スルノ恐アル時

五 一ノ訊問ニ對シ陳述ヲ為ス時ハ其技術及ヒ營業ノ機密ヲ漏スノ恐アル時

第一ノ場合ニ於テハ官吏其所屬官廳ノ證書ヲ以テ之ヲ拒ムハシ第二乃至第四ノ場合ニ於テハ裁判所其證人ト為ルト拒ムノ理由アルト否トヲ判定ス可シ

第七十四條 證人其理由ヲ申立ス又ハ其理由ヲ不當ト判定シタル後宣誓ヲ拒ミ又ハ證據ヲ陳述スルト拒ム時ハ裁判所ハ之カ為メノニ生シタル訴訟入費ヲ負擔セシメ尚ホ刑法第八十條ノ罰金ヲ言渡ス可シ若シ納完セサルハ財産ヲ差押テ之ヲ追徴シ又ハ刑法第二十七條ニ照シテ処分スヘシ

證人前項ノ言渡ヲ受ケ仍ホ陳述ヲ拒ム時ハ  
立證者ノ申立ニ依リ其陳述ヲ為サシムル為  
ノ之ヲ留置スルヲ得其期限ハ本案ノ裁判  
終結ヲ超エ可ラス此場合ニ於テハ強迫執行  
ニ関スル規則ヲ適用スヘキモノトス  
留置ノ決議ニ對シテハ故障ノ申立ヲ為ス  
ヲ得

軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ其  
官等ニ拘ハラス陸海軍々法令議ニ委託ス可  
シ

第七十丑条 證人ハ其所持ノ呼出狀其他適者  
ノ方法ヲ以テ人違ナキヲ確定シタル後格  
別ニ訊問ヲ為ス可シ但訊問前ニ宣誓ヲ為ス

ヲ要ス

特別ノ原由殊ニ宣誓、許否ニ付キ疑アル時  
ハ訊問ノ後マテ宣誓ヲ延引ヲ猶豫スルヲ  
得原被告共ニ宣誓ヲ要セサルヲ申立ル時  
ハ之ヲ為サシメサルヲ得但原被告ハ此申立  
ヲ取消スルヲ得ス

第七十六條 訊問前ニ為スヘキ宣誓ハ左ノ如  
シ

余誰某ハ愛憎畏懼ノ心ナリ正實ニ陳述ヲ為  
ス可キヲ誓フ

訊問後ニ為ス可キ宣誓ハ左ノ如シ

余誰某ハ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ為  
シタルヲ誓フ

第七十七條 宣誓者ハ裁判官ノ宣誓書ヲ朗讀  
スルニ隨ヒ一字毎ニ追言シ又裁判官ノ交付  
シタル宣誓書ヲ讀ムトテ得ル時ハ之ヲ宣誓  
シタル者ト認ム可シ  
文字ヲ書スルトテ得ル啞者宣誓書ヲ寫シ之  
ニ署名シタル時ハ宣誓ヲ為シタルモノト認  
ム可シ文字ヲ書スルトテ得サル啞者及ヒ文  
字ヲ讀ムトテ得サル聾者ハ其方法ニ達シタ  
ル通事ニ依テ宣誓ヲ為サシム可シ

九月一日午前會議

南部 栗原 中津 宮城 出席

宣誓前宣誓者ニ對シ宣誓ノ性質ト事實ヲ隱  
蔽シテ偽証ヲ為スニ於テハ刑法ニ觸ル、ト  
テ適宜ニ諭ス可シ  
証人一度宣誓シテ訊問ヲ受ケタル后同一ノ  
訴訟ニ付再度訊問ヲ受ル時ハ更ニ宣誓ヲ要  
セズ其以前ノ宣誓ニ依リ再度陳述ノ正実ナ  
ルトテ証スルヲ得  
第七十八條 証人ノ訊問ハ其身分職業宗旨ニ  
関スルトテ必要ナル場合ニ於テハ訊問事件  
ニ付其人品ニ関スルトテ及ヒ原告ト關係ノ  
模様ヨリ始ム可シ  
証人ハ其訊問ヲ受ケタル事實ニ付テ陳述ス



可<sub>レ</sub>但<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>陳述セント欲<sub>ス</sub>ル<sub>レ</sub>事實ヲ記載シタ  
ル<sub>レ</sub>旨<sub>ニ</sub>而<sub>テ</sub>朗讀ス可<sub>カ</sub>ラス  
証人ハ訊問ヲ受ケタル<sub>レ</sub>事實ニ付キ成ルヘク  
急義ヲ連續シテ陳述ス可<sub>シ</sub>裁判所ハ必要ナ  
ル<sub>レ</sub>場合ニ於テ其<sub>レ</sub>陳述ヲ明瞭ニシ又ハ之ヲ完  
全ニシ又ハ証人ノ<sub>レ</sub>事實ヲ知リ得タル<sub>レ</sub>原因ヲ  
質人<sub>ニ</sub>為メ訊問ヲ為ス<sub>ル</sub>ヲ得  
各証人ノ<sub>レ</sub>陳述相矛盾スル<sub>レ</sub>時ハ之ヲ對質セシ  
ム<sub>ル</sub>ヲ得

第七十九條 列席裁判官又ハ檢事連班スル<sub>レ</sub>時  
ハ証人ヲ訊問スルニ付テハ第四編第一章第  
二節第二十八條ノ規則ヲ適用ス可<sub>シ</sub>  
原告<sub>ニ</sub>告<sub>ス</sub>証人ノ<sub>レ</sub>陳述ヲ遮断ス可<sub>カ</sub>ラス事實

ノ<sub>レ</sub>説明ニ必要ナル<sub>レ</sub>案件ヲ為シトスル<sub>レ</sub>時ハ其  
旨ヲ裁判長ニ申立可<sub>シ</sub>

質問ノ<sub>レ</sub>許否ニ付疑アル<sub>レ</sub>時ハ裁判所之ヲ判決  
ス可<sub>シ</sub>

第七十條ニ記載スル<sub>レ</sub>裁判所ノ<sub>レ</sub>命令ニ違背シ  
出頭セザル<sub>レ</sub>者ニ對スル<sub>レ</sub>処罰權ハ代審裁判官  
受託裁判所ニモ屬スル<sub>レ</sub>モノトス

代審裁判官又ハ受託裁判官ノ<sub>レ</sub>前ニ於テ証人  
ノ<sub>レ</sub>陳述又ハ宣誓ヲ拒ム<sub>レ</sub>時又ハ裁判官ノ<sub>レ</sub>職權  
若シクハ原被一方ノ<sub>レ</sub>申立ニ依リ為シタル<sub>レ</sub>訊  
問ニ答フル<sub>レ</sub>ヲ拒ム<sub>レ</sub>時ハ起訴裁判所ハ其<sub>レ</sub>當  
否ヲ判決ス可<sub>シ</sub>其<sub>レ</sub>判決ノ<sub>レ</sub>執行ハ代審裁判官  
又ハ受託裁判所ニ屬スル<sub>レ</sub>モノトス

前項ノ裁判官原被告ノ申立タル質問ヲ差止  
メタル時ハ原告ハ起訴裁判所ノ口頭對審  
ニ於テ更ニ質問ヲ為シ得ルト否トノ判決ヲ  
乞フコトヲ得但裁判官ハ此判決ニ後フ可シ  
第八十條 皇族又ハ勅任官証人ト為ルヘキ時  
ハ代審裁判官又ハ受託裁判所ノ裁判官其任  
所ニ就テ訊問ヲ為シ且宣誓ヲ示シテ署名  
捺印セシム可シ  
証人疾病公務其他正当ノ事故アリテ出頭ス  
ル能ハサル時ハ裁判官其所在ニ就テ訊問ス  
可シ  
第八十一條 証人ノ陳述ハ訊問ノ時各記之ヲ  
調卷ニ筆記ス可シ其調卷ニハ証人ノ訊問ヲ

受ル前又ハ後ニ宣誓シタルコト又ハ宣誓ヲ為  
サスシテ訊問ヲ受ケタルコトヲ明記ス可シ調  
書中ノ陳述及ヒ宣誓ニ関スル部分ヲ證人ニ  
讀聞セ又ハ展開セシム且其相違ナキヤ否及  
其陳述ニ變更ス可キコトノ無キヤ否ヲ問フ可  
シ  
證人ハ其陳述ヲ増減變更スルコトヲ得其増減  
變更ハ調卷ノ紙端又ハ欄外ニ記シテ之ヲ讀  
聞セ又ハ展開セシム可シ  
證人ハ調卷ノ相違ナキコト及宣誓ノ有無ヲ證  
スル為メ之ニ署名捺印ス可シ若シ捺入削除  
及欄外ノ記入アル時ハ證人裁判官及各記之  
ニ認印ス可シ

其他第四編第一章第二節第二十二條第三十  
三條、規則ヲ適用ス可シ

第八十二條 証人ハ訊問ヲ受ケタル後之カ为  
メ生シタル費用殊ニ日稼ヲ以テ生業ト為ス  
時ハ其日稼高ニ等シキ償金ヲ即時ニ請求ス  
ルヲ得

証人ヲ訊問シタル裁判官ハ証人ノ呼出状ヲ  
所持スル時呼出状ニ其金額ヲ確定シテ記載  
ス可シ証人ノ請求スル金額ニ疑アル時ハ其  
請求ヲ確定ニセシメ又ハ其意見ヲ以テ判決  
ス可シ

原被告ハ前項ノ處分ニ對シ故障ヲ申立ル  
ヲ得ス其金額ヲ支辨スヘキ義務者ト認メラ

レタル者ハ直ニ之ヲ拂フ可シ但唇記ハ調唇  
ノ欄外ニ其事ヲ記載ス可シ

九月一日午後會議

中塩田伊東栗塚  
村宮城出席

第六節 鑑定人

第八十三條

裁判所ノ職権又ハ原告ノ申立

ニ依リ鑑定人ヲ用フル場合ニ於テハ本節ノ

規則ヲ除クノ外證人ニ関スル諸規則ヲ適用

ス可シ

第八十四條

受訴裁判所ニ於テ鑑定ヲ要用ト

議決スル時ハ原告被告ヲシテ相當ノ鑑定人ヲ

指名セシム可シ

鑑定人ノ指名ニ付原告被告即時ニ同意セサル

時ハ雙方協議ノ為メ其事情ニ應ジ適當ノ期

限ヲ定ムルヲ得

鑑定人ノ指名ニ付即時又ハ期限内ニ原告被告